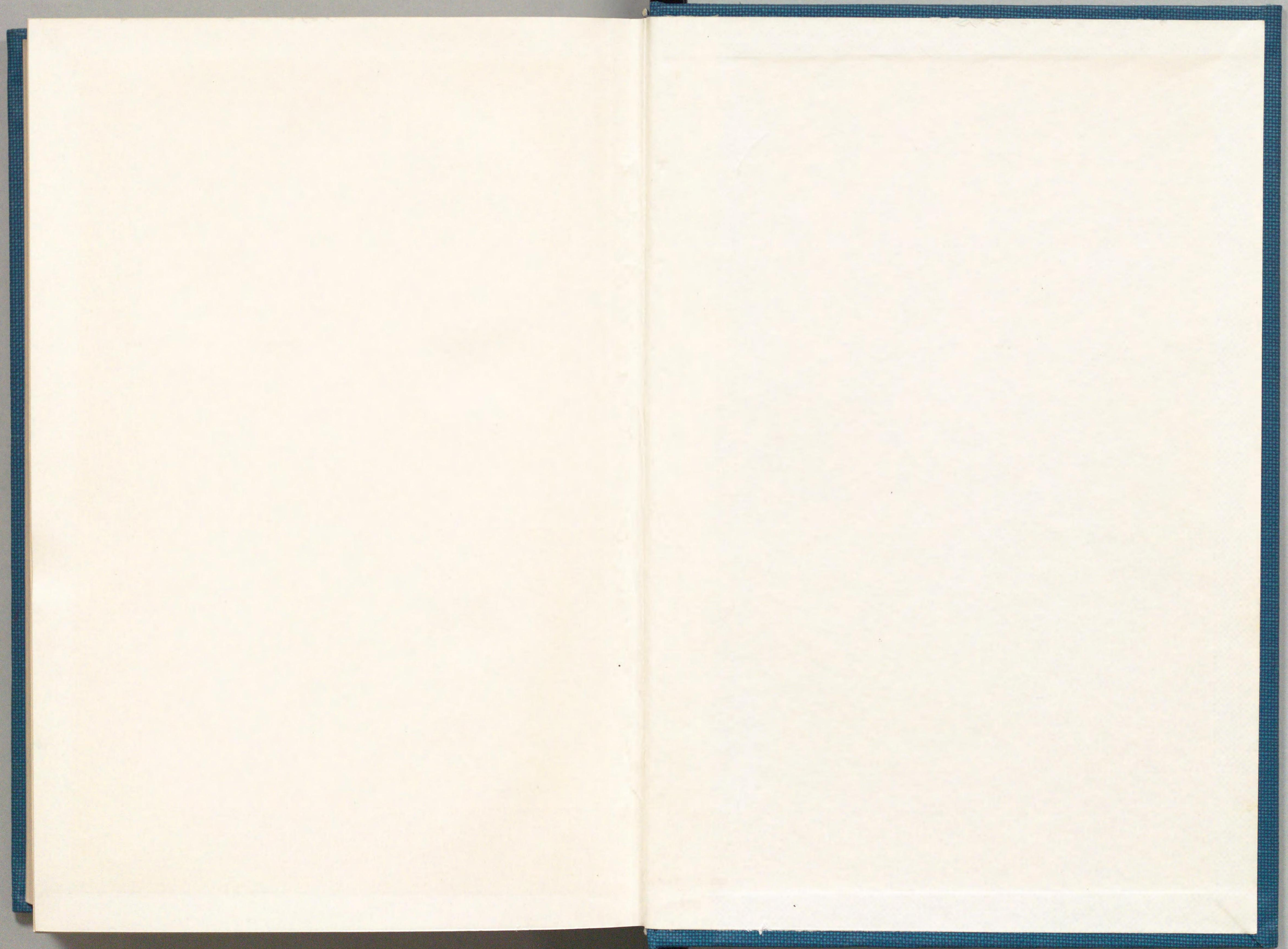
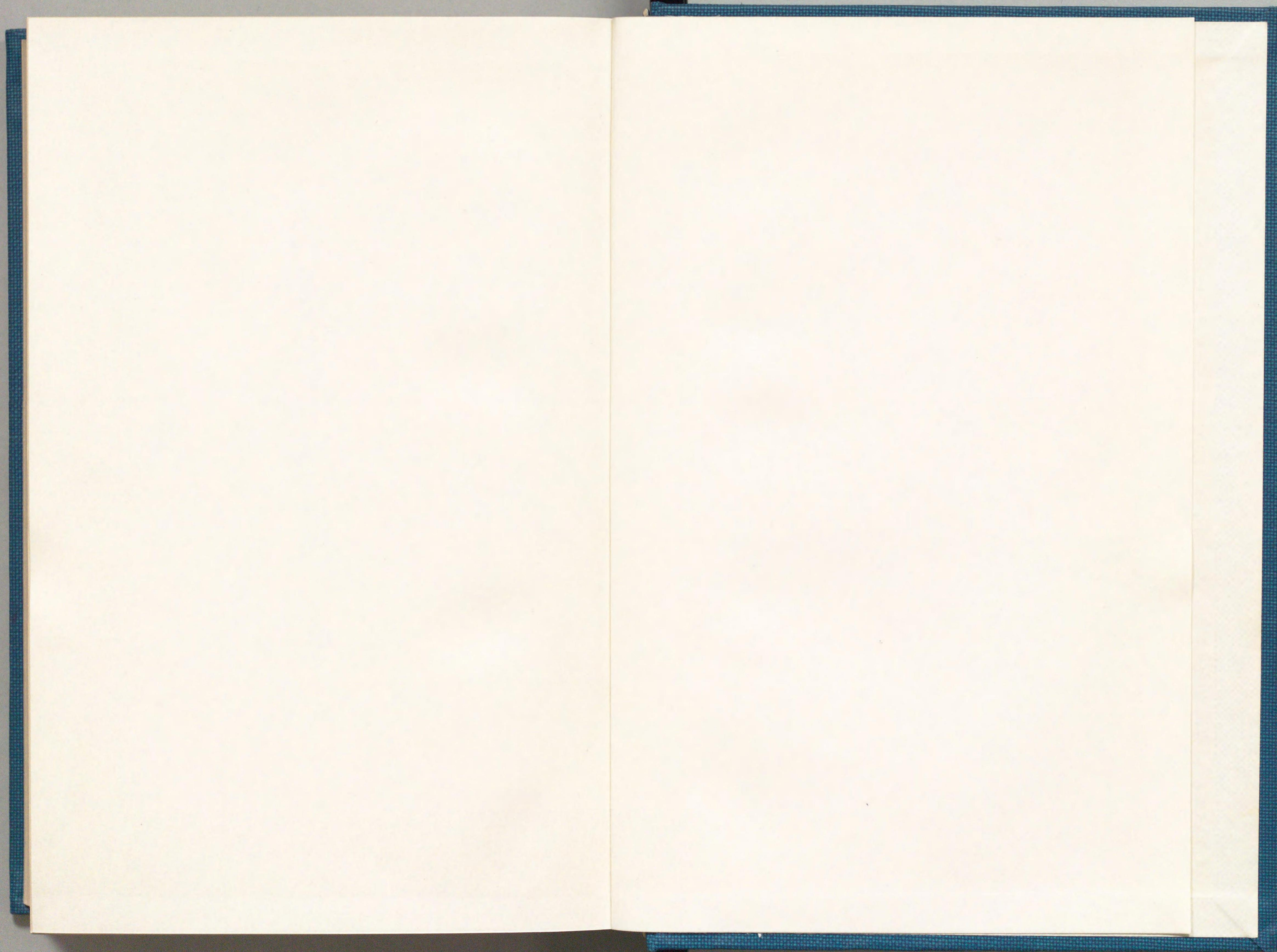


911.12
1442m



00247635



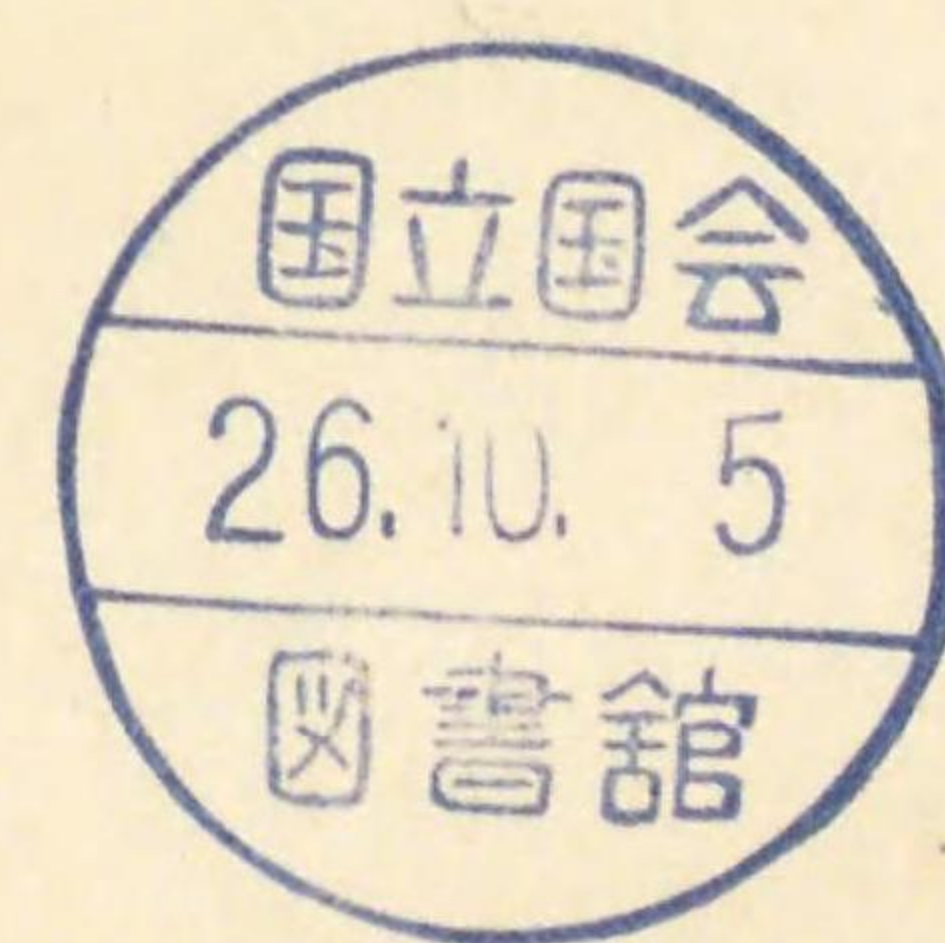


工 B 93

萬葉集新考 卷三



911.12 I442m



247635

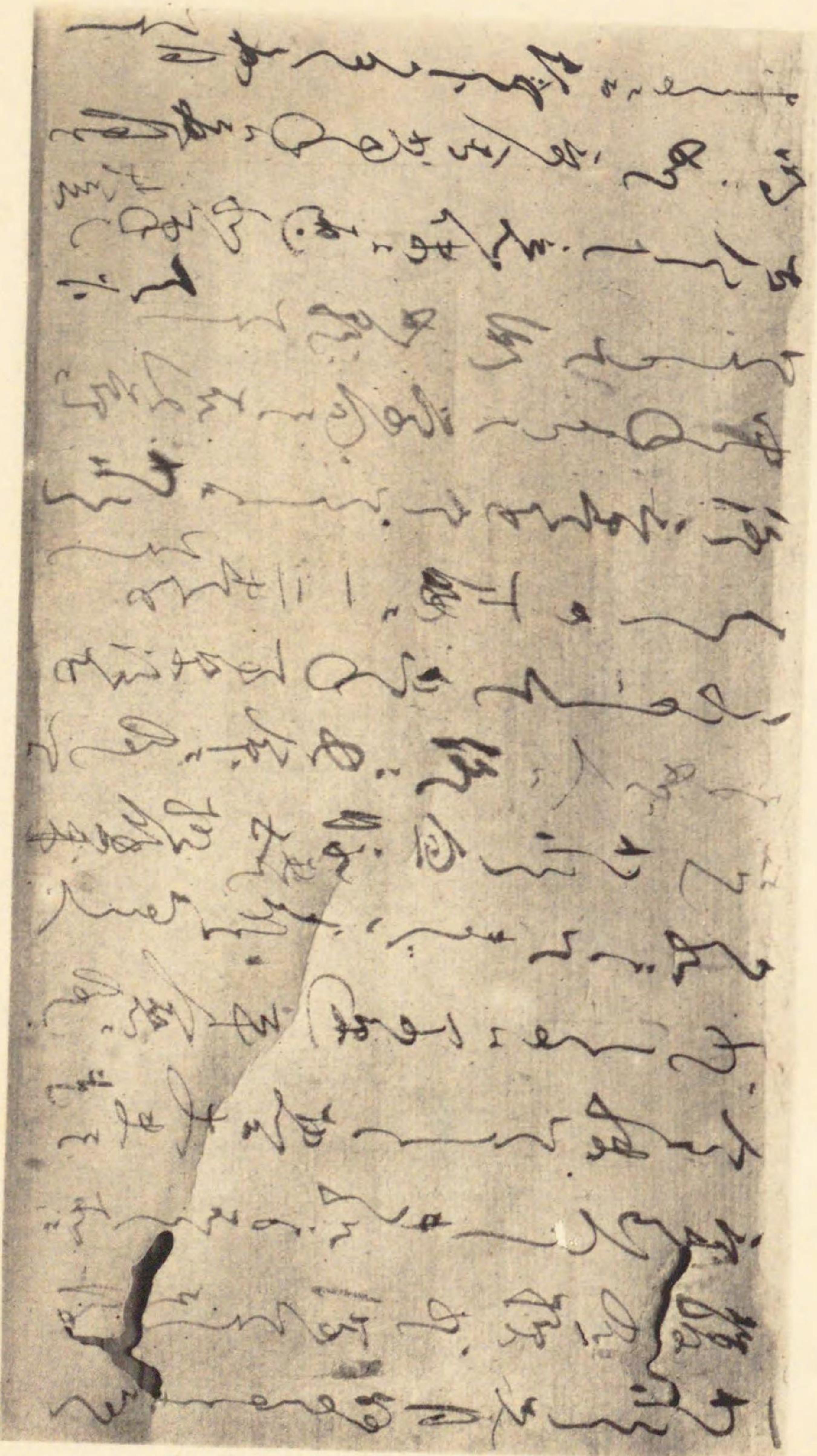
圖版解説

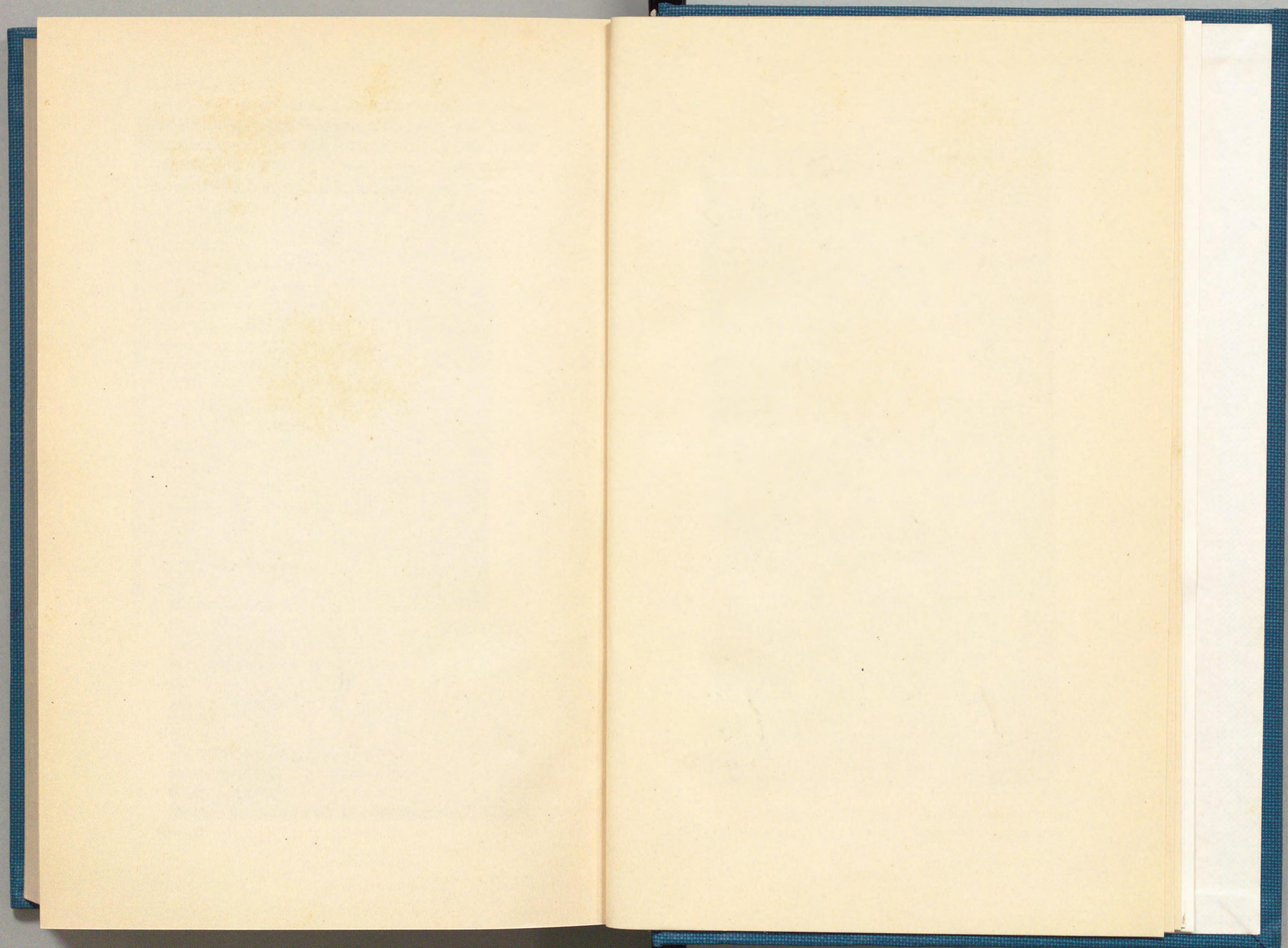
賀茂真淵書翰。行數六十七。切つて二段に貼つてある。上段三十五行縦

四寸九分五厘横一尺八寸、下段三十二行横一尺五寸六分である

譯文

一われら先月何の事もなく
 腹工含損少々瀉いたし其後
 氣むつかしき様にも有之所に
 全快いたし候惣て丈夫に候ま、
 少々之事は早速奉愈に及候
 か様に候はゞまだよほどながら
 候はんわれら血脈惣て五十餘歳
 最も成候へば終に長命に及候へば
 たのもしく候近年万葉注を
 はじめす暇に二卷をいたし
 終三卷を今いたし候われら
 中年よりの學問に候故此節に
 いたりて漸成就いたし天下
 古今之意味に通、和漢之大意
 明に成候哥會當年は毎月さ
 申事に随分かるく毎月いたし
 書會も一月十二ヶ日有之候
 貴殿哥を御情可被入候出來候は
 よしあしかまは守見せ可被申候
 あしきにつけて難を書つけ候へば却てよき事を
 得候もの也哥なまよく得候へば古人の
 人情に通じ古語に通、天下に情さ
 語の▲は無之候へば千萬の事も通候もの也
 からの學問四角に候故早速待
 ちるゝものにて理屈成様に候へども
 書物にいふは學者のいひ事のみ天下
 の臣民の政事は學者にては埒明
 申ものにあらす四角なる事を學候へばそれがた
 さ成候て不窮之工夫は不出來もの也
 日本の神遣はひろし天下の
 民をおのがまゝの様にしてつゞむる
 大むね有て治め給ふ故に天下
 とく治り天皇の御末もつゞき給ふ也
 此心も古哥を詠候にてしられ候
 事也





當月は題

さみだるゝ頃 是は去年死候河津伊右衛門妻はわれら

養子分にていかふれんころ成しな一周忌に

伊右衛門會主に候へば皆いたかの哥よみ候

さみだれの心少しよせていたみたまみ申候

六月

納涼 いつもの題也

七月

葛のはに風のふくなみて

是もくすの哥に常有事也

八月

海への家にて月を見て

九月

山里へもみち見にまかりて

十月

時雨 落葉

十一月

氷むすびそめたるか

十二月

雪のふりける日

右の通りにて皆やすき題也たゞ

古今集をよく見てよみ給へ又万葉集を

心得ずとも五へん通して見給へ左候へば

語どもに近付出来て半分ばかりは心得

らるゝもの也その上にてわれら書候もの

を見候はゞしれ候はん必心かけ候へ

右の題の事あはどのおはんどのも

御物がたり候てよみて御こし候へ

かの二所よりも御こし候様にさ

御申可有之候以上

五月廿四日

衛士

市左衛門殿

充名の人市左衛門は濱松の人梅谷氏で眞淵の實子である。第十八行の情

は精の誤である。第廿三行語の下は外であらう。河津伊右衛門は後の

加藤大助字萬俊である。其妻河津氏の歿せしは森訖三君の發見に據れば

寶曆十年五月十六日であるから此書牀は寶曆十一年六十五歳の時に書い

たものである。此書牀には考證すべき事が澤山あるが餘白が無いからす

べて省略する

凡例

漢字のみにて書けるが萬葉集の原文にて假字がきにせるは譯文なり
原文は寛永版本に依りたり。但誤字なる事明白なるものは指摘の煩を
避けて直に改めたる處あり。又俗字を正字に改めたる處あり
譯文中傍訓を施したるは諸家(特に略解古義)の訓の一定せざりし處と、
諸家の訓を斥けて余が新に訓ぜし處と、讀者が讀み惱み又は讀み誤る
べき恐ある處となり。その別は註解を讀まばおのづから明ならむ
歌の中に□を以て圍めるは衍字、即宜しく除くべき字
字間に△を挿みたるは脱字又は脱文ある處
字の左傍に小さき△を附したるは誤字
字の右傍に△を附したるは注意すべき字なり
又歌の中に()を以て括したるは枕辭なり

萬葉集新考第三

目次

卷七

卷第七新製目録……………一二一三頁
雜歌……………一二一九頁
譬喻歌……………一三七八頁
挽歌……………一四六六頁
○……………一四七三頁
連體格の代に終止格をつかひたる(附録)……………一四七五頁

卷八

春雜歌……………一四八三頁
春相聞……………一五〇五頁

夏雜歌	一五一九頁
夏相聞	一五四〇頁
秋雜歌	一五五一頁
秋相聞	一六一九頁
冬雜歌	一六四八頁
冬相聞	一六六三頁

卷九

卷第九新製目錄	一六七三頁
雜歌	一六八一頁
相聞	一七九一頁
挽歌	一八三三頁
流布本卷第七至卷第九目錄	一八八一頁

萬葉集卷第七新製目錄

雜詠

詠天一首	一一二九頁
詠月十八首	一一三〇
詠雲三首	一一三三
詠雨二首	一一三五
詠山七首	一一三六
詠岳一首	一一四一
詠河十六首	同
詠露一首	一一五二
詠花一首	一一五三
詠葉二首	同
詠蘿一首	一一五五

詠草一首

一二五五

詠鳥三首

一二五六

思故鄉二首

一二五七

詠井二首

一二五八

詠和琴一首

一二五九

芳野作五首

同

山背作五首

一二六三

攝津作二十一首

一二六七

羈旅作九十首

一二七七

問答四首

一三四三

臨時十二首

一三四五

就所發思三首內一旋頭歌

一三五四

寄物發思一首

一三五六

行路一首

同

旋頭歌二十四首

一三五七

譬喻歌

寄衣三首

一三七八

寄玉五首

一三八一

寄木二首

一三八四

寄花一首

一三八五

寄川一首

一三八六

寄海三首

一三八七

寄衣五首再

一三九〇

寄絲一首

一三九三

寄玉十一首再

一三九四

寄日本琴一首

一四〇三

寄弓二首

一四〇四

寄山五首

一四〇七

寄草十七首

一四一〇

寄稻一首

一四二一

寄木六首再

同

寄花六首再

一四二七

寄鳥一首

一四三一

寄獸一首

一四三三

寄雲一首

同

寄雷一首

一四三五

寄雨二首

同

寄月三首附一首

一四三七

寄赤土一首

一四四一

寄神二首

一四四二

寄河六首再

一四四四

寄埋木一首

一四四九

寄海六首再

一四五〇

寄浦沙二首

一四五六

寄藻四首

一四五八

寄船五首

一四六一

旋頭歌一首

一四六四

挽歌

雜挽十三首

一四六六

○

羈旅歌一首

一四七三



萬葉集新考卷七

井上通泰 著

雜詠

詠天

天の海に雲の波たち月の船星の林にこぎかくる見ゆ
天海丹雲之波立月船星之林丹撈隱所見

右一首柿本朝臣人麿之歌集出

星を林に比したるはその繁きこと林木に似たる故なり。他の三者の見立の形似によれるとは異なり。さて海及波と林とは相集まりて一の景を組立つべきものにあらず。又大海を渡る船の林の中に漕ぎ隠れむことあるべからず。されば初句の天海丹は天河丹の誤にあらざるか六帖には天ノ河雲ノ渡タチ月ノ舟星ノハヤシニコギカヘルミュとありとも思へど卷十に

天の海に月の船うけ桂槌かけてこぐみゆ月人をとこ
といふ歌あれば軽々しく誤とは定むべからず。但此歌をたへて『人麻呂の心詞也』
などいへるは古人に阿るものなり

詠月

常はかつておもはぬものを此月のすぎかくれまくをしきよひかも
常者曾不念物乎此月之過匿卷惜夕香裳

常者曾不念物乎此月之過匿卷惜夕香裳
ツマ
代匠記に治字六帖
夕月夜ノ哥ニ入テ今ノ
点ノコトクアレトツモト
ヨムコトホツカマシヤ
ナニ木高者由木不殖
トツモホヲ十六ニ吾待
之代者治無トヨメルニ
モ共ニ常ノ如クカツテ
ト点ノコトクアレトツモ
ムハキ歎

カツテは更ニなり○コノ見ル月ノ過ギ隠レムガ惜キヨハナルカナ今マデハ更ニ
月ヲ惜シト思ハザリシモノヲといへるにて古義に
宴席などの興に乗てよめるか又はめづらしき友などにあへる夜よめるならむ
といへる如し。但同書に『常ハ曾テ露ホドモ何トモ思ハヌ此月ナレド』と釋けるは非
なり。コノ月はコノ見ル月といふ意にて畢竟コヨヒノ月といふ意なり

ますらをのゆずゑふりおこし借高の野邊さへきよくてる月夜かも
大夫之弓上振起借高之野邊副清照月夜可聞

初二はカリの序○カリタカノ野は大和添上郡東市村にある野なりといふ○サへ
といふ辭心得がたし。略解には

サへは軽く意得べし。野ベモイヅクモといふが如し
といひ古義には

野邊マデ清クと云意にて遠く借高野を望てよめるさまなり
といへり。略解の説によれば其野邊にてよめるにて古義の説によれば他處にあり
てよめるなり。案するにこは高き處たとへば高圓山(卷六三一頁)○九にカリタカノ高マ
ト山ヲタカミカモといふ歌ありに立ちてよめるにて爰モトノミナラズ遙ニ見ユ
ル借タカノ野邊サへといへるなり○ツクヨは月といふに同じ

山のはにいさよふ月をいでむかとまちつつをるによぞくだちける

山末爾不知與歷月乎將出香登待乍居爾與曾降家類

イサヨフは出でむとして出でざるなり。クダツはフクルなり○卷六(一一一九頁)に
山のはにいさよふ月のいでむかとなつ君之夜はくだちつつ
下にも

山のはにいさよふ月をいつとかもわがまちをらむ夜はふけにつつ
とあり

あすのよひてらむつく夜は片よりにこよひによりて夜長からなむ
明日之夕將照月夜者片因爾今夜爾因而夜長有

ヨヒは後世のヨハにて即ただ夜といふに同じ。コヨヒといふが今夜といふに同じ
きを思ふべし。○カタヨリニコヨヒニヨリテはコヨヒニ片ヨリテといふ意なり。卷
二(一六三頁)にも

秋の田の穂向のよれるかたよりに君によりななこちたかりとも
とあり。○夜ナガカラナムはコヨヒノ月ノ夜長ナレカシとなり

(たまだれの)小簾ヲスのま通トホシひとりみて見るしるしなきゆふづく夜かも
玉垂之小簾之間通獨居而見驗無暮月夜鴨

通の字は舊訓にトホシとよめるを略解にトホリに改めて「二の句より結句へつづ
く」といへり。古義には舊訓によりて

次句を隔て小簾ノ透間ヨリ見ルとつづく心持なり。略解に二の句より結句へつ
づくと云るは誤なり

といへり。下に
しづけくもきしには波はよせ家ウチるかこのいへとほしききつつをれば

とあると合せて思へば舊訓の如くトホシとよむべし。○シルシはカヒなり。獨見て
は飽足らずと云へるなり。卷三(四五五頁)にも

草まくら、たびにしあれば、獨して、みるしるしなみ、
、かけてしぬびつ、やまと
島根を

とあり

春日山おして照有テラセルこの月は妹が庭にも清有サヤケカル家里ウチ
春日山押而照有此月者妹之庭母清有家里

照有は舊訓并に古義にテラセルとよめるに従ふべし(略解にテリタルとよめるは
非なり)。春日山を照らせるなり。オシテを眞淵はオシナベテと譯せり。○結句は字の
まゝならばサヤケカリケリとよむべけれどさては意通せず。古義に家里を良思又

は羅思の誤としてサヤケカルラシとよめり。之に従ふべし。春日山にて妹が家を思遣りてよめるなり

うなばらの道とほみかもつくよみの明少夜はく^{ハフチ}だちつつ

海原之道遠鴨月讀明少夜者更下乍

第四句は代匠記にヒカリスクナキとよみて

ヒカリスクナキとは光輝の少きと云にはあらず。照間の少きなり。道トホミカモと云にて知べし

といひ古義には

夜が更行かば月もますますさやかなるべきに然はなくて夜は更つ、月の光のすくなく朧なるは海原の道が遠き故にこゝに月の至るが遅きなるべしとなり。中山嚴水此歌は海邊にて朧なる月を見てよめるなるべし。月の朧なるとはいはずして海原の遙なる故に月の光すくなきと云なしたりと云り

といへり。案するに此歌は月を遠方より來るものと假定して凡遠方より來るものは海を渡りて至るが故にウナバラノ道トホミカモといへるなり。海邊にてよめ

る歌とせるは歌人の心境を知らざる説なり○さて遠方より來ると光の少きとは相關せざる事なり。されば第四句の明少は照遲などの誤としてテラサクオソキとよむべきか

(ももしきの)大宮人のまかりでてあそぶこよひの月のさやけさ

百師木之大宮人之退出而遊今夜之月清左

マカリデテは宮ヨリ里ニ罷出デテなり。作者は素より大宮人の中にこまれるなり

○サヤケサはサヤケキコトヨといふ意なり。古義に『月ノサヤケサイカバカリゾヤカギリモナシと云意なり』といへるはサヤケサを玉緒などの説に従ひて名詞と見たるなれど此格は少くとも本集にては名詞とは見べからず(卷六一〇九 参照)

(ぬばたまの)夜わたる月をとどめむに西の山べにせきもあらぬかも

夜干玉之夜渡月乎將留爾西山邊爾塞毛有糠毛

アラヌカモはアレカシなり○トドメムニは卷五なるシロガネモ金玉モナニセムニなどと同格にてトドメム爲ニといふ意なり(八五九頁参照)

此月のここにきたればいまとも妹がいでたちまちつつあらむ
此月之此間來者且今跡香毛妹之出立待乍將有

略解に

宣長云。おのが家にて月の影のさす所を見てハヤココマデ月ノ影ノ來ツレバ夜
ハ更タリ、妹ガ待ランといふ意なり。といへり

と云ひ古義も此説を是認せり。案するにココニキタレバの下に夜ハフケタリとい
ふ辭を補ひて釋けるは妄なり。コノ月ノは作者の辭、ココニキタレバイマの九言は
妹の心なり。即

この見る月を妹が其家にて見て月ハハヤココ(たとへば軒端)マデ來タレバ我背
子ハ今來ムと門に出立ちて我を待ちつつあらむか

といへるなり。今トカモのトはト思ヒテなり。カは例の如く下にめぐらして心得べ
し。モは助辭

(まそかがみ)てるべき月をしろたへの雲かかくせるあまつ霧かも

眞十鏡可照月乎白妙乃雲香隱流天津霧鴨

月ヲは月ナルニなり○アマツキリカモは天ツ霧カ隱セルといふべきを略せるな
り。モは助辭○さて略解には月のまだ出でぬ趣とし古義には月の朧なる趣とせり。
案するに月既に出でてたどおぼろなるのみならむには其光を蔽へるは雲にや霧
にや一目して辨ふべければ雲カ隱セル天ツキリカモなど疑ふべきにあらず。され
ば略解の説に従ひて月のまだ出でぬ趣とすべく又二三の間にマダ照ラヌハとい
ふ辭を補ひて聞くべし。元來空を仰ぎてよめる歌にあらず。山端に向ひてよめる歌
なり

(久方の)あまてる月は神代にか出反等六としはへにつつ

久方乃天照月者神代爾加出反等六年者經去年

代匠記に

月の光のみ昔にかはらずめでたく照るをほむる詞なり
といひ略解に

年を経て月の光のかはらぬは神代へ立かへりては出るならんといふなり

といひ古義には

人はいくほどもなくはかなきものなれば未來の事はいかならむ見知べき理ならぬを月は幾萬世經てもかはらず同じ光に照ものなれば又あまた年經行つゝ後遂には昔の神代の如き世にも立かへりつゝ出て照すらむかと月を羨むやうによめるなるべし

といへり。古義の説の如くならばイデカヘリナムといふべく結句も年ノヘナバと云はずばかなはじ。さればまづ略解の説に従ふべし。但イデカヘルは卷四(七〇九頁)なるシニカヘルの例によればいく度もいく度も出づるなり。カミ代ニのニはユに通ずるニなり。略解に神代へかへる意としたるはひがごとにていく度も神代より出直すなり

(ぬばたまの)夜わたる月をおもしろみわがをる袖に露ぞおきにける

烏玉之夜渡月乎何怜吾居袖爾露曾置爾鷄類

ワガヲルは我見ツツ居ルといふべきを略せるなり(略解)四五の間に夜が更ケテといふ辭を挿みて聞くべし

みなぞこの玉さへ清く可見裳^{ユダ}てるつく夜かも夜のふけゆけば

水底之玉障清可見裳照月夜鴨夜之深去者

玉は小石なり。第三句を舊訓にミツベクモとよめるを略解にミユベクモと改めたるを古義に舊訓に復したり。キヨシトとあらばこそミツベクモとよむべけれ。今はキヨクを受けたれば略解の如くミユベクモとよむべし。キヨシト見ル、キヨク見ユといふが定格なり

霜ぐもりすとかあらむ(久堅の)夜わたる月の不見^{ミユ}念^{オモヘバ}者^{ナクモヘバ}

霜雲入爲登爾可將有久堅之夜度月乃不見念者

シモグモリは霜のふる前に水蒸氣の空に漲るをいふ。○ストニカアラムはストテ然ルニヤアラムとなり。○結句を舊訓にミエヌオモヘバとよみ古義にミエナクモヘバとよめり。いづれにても可なり

山のはにいさよふ月をいつとかもわがまちをらむ夜はふけにつつ
山末爾不知夜經月乎何時母吾待將座夜者深去乍

イツトはイツ出デムカトなり

妹があたりわが袖ふらむ木間よりいでくる月に雲なたなびき

妹之當吾袖將振木間從出來月爾雲莫棚引

略解に

妹ガアタリへ向ヒテ吾フル袖ヲ木間ヨリ月ニ見ルランニ雲ナタナ引ツト也
といへり。木間ヨリイデクル月ニとあるを妹ガ木間ヨリ月ニ見ルランと釋くべき
ならむや。古義には

妹ガアタリへ向ヒテ袖フラバ月影ニ妹ガソレト見ベキナレバイザ吾袖振ラム
ヲ木間ヨリ出來ル月ニ雲棚引コトナカレとなり

といへり。即雅澄は第二句にて切りて心得たるなり。此説うべうべしけれど二三は
なほワガ袖フラムコノマヨリとつづきて聞ゆるをいかかせむ。雅澄の説の如くな
らば第二句はソデフリテムヲなどあるべし。案ずるにこは卷二なる

石見のや高つぬ山の木間よりわがふる袖を妹みつらむか

といふ歌を本歌とせるにて初二はコノマの序にて一首の意には與からざるなり。

あまりに奇抜なる序なるによりて前人のききまどひしなり。序中の妹ガアタリは
辭足らぬこゝちすれど卷十一に

しろたへの袖はまよひぬ我妹子が家のあたり乎やます振りしに

とあれば妹ガアタリヲ目當ニ袖ヲ振ルといふことを妹ガアタリヲ袖フルといひ
て通せしなり

靱ユキかくる伴のを廣き大伴に國榮えむと月はてるらし

靱懸流伴雄廣伎大伴爾國將榮常月者照良思

靱は矢を盛る器なり。ユギカクルトモノヲは武官なり。ヒロキは今眷屬ガ廣イ、親類
ガ廣イなどいふヒロイにて多き事なり。○さて略解には

大伴ニといふは衛門府の陣をさしていへるならん。心は大伴氏ノ護レル御門ニ
カク月ノ隈ナク明ラカナルヲ見レバマスマス國榮エマサンと大御國をも我家
をも祝ひてよめるなるべし

といひ古義は全く此説に據れり。此説の穩ならざるは一見して知らるべければ今
は批評の煩を避けて直に余の説を述べむに此歌の大伴は本集に大伴ノ高師ノ濱、

大伴ノ御津ノ濱、大伴ノ御津ノ松原などある大伴とひとしく攝津の地名にて歌の初二は序なり。國は即大伴ノ國なり。いにしへは一郡一郷をも國といひしなり。クニサカエムトは國榮ユベクといはむが如し。卷十八にもスメロギノ御代サカエムトアヅマナルミチノク山ニクガネ花サクとあり。されば此歌の意は前人の心得しとはいたく異なり。クニサカエムトは面白き辭なり

參照 美夫君志卷一下(九四頁)大伴乃御津乃濱松の下に上田秋成の冠辭考續貂の説を取捨して

大伴は下の歌に大伴乃高師能濱ともありて此ほとりの大名なり。、、これを枕詞とするは非也。上古大伴氏は代々大連の重職にありて攝津河内の兩國を食地に賜りて領し居りしなるべし。、、故に其地(○住吉難波など)の大名を大伴とはいひしならん。本集卷七に靱懸流云々とある是此氏人の榮えむ事を祝たる歌にて大伴即地名なり

といへり。秋成の原説には採られぬこと(大伴と雄伴とを同視せるなどもあれど大伴を地名と認めたるは活眼なり)

詠雲

あなし河河浪たちぬ卷目マキモクのゆつきがたけに雲居立クモリタテ有良思アラシ

痛足河河浪立奴卷目之由槻我高仁雲居立有良志

穴師川は大和國磯城郡にあり。卷向山より出でて初瀬川に入る小流なり。ユツキガタケは卷向山の一峯なり。○卷目は舊訓にマキモクとよめるを略解古義にマキムクに改めて古義に

卷向とも纏向とも書り。こゝに目字を書るに依てマキモクと訓は非なりといへれどマキムクをマキモクともいふはミムロをミモロといひ、コヨルギ(風俗歌)をコヨロギ(古今集)ともいふが如し。こゝはマキモクとよみて可なり。○クモキはただ雲といふにひとし。卷三にも朝サラズ雲キタナビキ又アリマ山雲キタナビキとあり(四五九頁及五六〇頁參照)○雨ふらむとしてまづ風のおこる様なり。○此歌にタツといふ語二つあり。有は衍字とすべし。此字無き本あり

(足引)山河の瀬のなるなべにゆつきがたけに雲たちわたる

足引之山河之瀬之響苗爾弓月高雲立渡

右二首柿本朝臣人麿之歌集出

ナルナベニはナルニツレテなり(卷二七頁參照)ナベに苗の字を當てたれどへはなほ濁るべし○山河の瀬の鳴るは風の強き爲なり。前の歌とおなじく夕立の趣なり。略解に

右二首ともに雨降といはずして知らせたり

といへるは非なり。雨はいまだ降らぬなり○二首ともに雄渾にしてめでたし

大海に島もあらなくにうなばらのたゆたふ浪にたてる白雲

大海爾島毛不在爾海原絶塔浪爾立有白雲

右一首伊勢從駕作

大和の狭き國原に住みて雲の山にたなびけるを見馴れたる目に島山も無き大海の末に雲の立てるを見て訝しみたるなり。諸註の釋徹底せず○大海と海原と重複せり

詠雨

吾妹子が赤裳の裾の將染渥けふのこさめに吾さへぬれな

吾妹子之赤裳裙之將染渥今日之露霖爾吾共所沾者

第三句は略解にヒヅチナムとよめるに従ふべし(古義にはヒヅツラムとよめり)。ヌレナはヌレムなり○一首の意は我妹子ノ裳ノ小雨ニ濡レナムガイトホシキニイザ我モ附合ニ濡レムといへるなり○者は名の誤なり。露霖は詩經小雅北山に見えたる熟字なり。文選吳都賦にも見えたり

とほるべく雨はなふりそ吾妹子がかたみのころもわれ下に著有

可融雨者莫零吾妹子之形見之服吾下爾著有

著有はキタリともケリともよむべし。ケリはキタリにおなじ。古義にキケリと云ふに同じといへるは非なり。カタミノの下に大切ナといふ辭を挿みて聞くべし。旅中にてよめるなり。卷三(四五二頁)にも

秋風のさむきあさけをさぬの崗こゆらむ君に衣かさましを

といふ歌あり

詠山

(なる神の)おとのみききし卷向マキムクの檜原の山をけふみつるかも
動神之音耳聞卷向之檜原山乎今日見鶴鴨

オトノミは後世のオトニノミにてそのオトは噂なり。卷六(一〇二七頁)にも
なる神のおとのみききし、み吉野の眞木たつ山ゆ云々

とあり

みもろの、其山なみに(こらが手を)まきむく山は繼ツグ之よろしも
三毛侶之其山奈美爾兒等手乎卷向山者繼之宜霜

ミモロノ山は三輪山なり。ソノは言の足らざるによりて補へるなり。卷三(四九七頁)
なるナデシコノ其花ニモガの類なり。山ナミは山ツヅキなり。卷六(一一六二頁及一
一七〇頁)にも山並ノヨロシキ國ト、フタギ山ヤマナミミレバとあり。卷向山は三輪
山の北に續けり。○繼之を略解古義にツギノ、とよみたれど山ナミニを受けたれば
ハツキテシヨシモ

ツグガとよむべし。さてツグガヨロシモはツヅケルガメデタシとなり

我衣色ワガコロモ服染イロニシメ(味酒ウメザケ)三室の山はもみぢしにけり

我衣色服染味酒三室山黄葉爲在

右三首柿本朝臣人麿之歌集出

契沖宣長は色服を服色の顛倒として服の字を初句に屬せり。さて宣長は色染をイ
ロニシメナムとよめり。又雅澄は服を將の字の誤としてイロニシメナムとよめり
(ソメとシメとはいづれにても可なり。古事記八千矛神の御歌に曾米紀ガシルニ斯
米ゴロモヲとあり。字はいづれにもあれイロニシメナムとよむべし。イロニとは黄
葉ノ色ニとなり。○第三句は古義に

十一に味酒之三毛侶と見えたり。こ、は之、字なければウマザケと四言に訓べし
といへり

(三諸就モロツク)三輪山みれば(こもりくの)はつせの檜原おもほゆるかも

三諸就三輪山見者隱口乃始瀨之檜原所念鴨

ミモロツクは古義に

三室齋ミモロなり。大神の爲に御室を齋ミモロき造り奉れる謂なり

といへり(卷六一一七) 参照○三輪と初瀬とは相隣れり

いにしへの事は知らぬをわが見ても久しくなりぬ天アマのかぐ山

昔者之事波不知乎我見而毛久成奴天之香具山

シラヌヲは知ラヌガなり。古今集なる

わが見ても久しくなりぬ住の江の岸のひめ松いくよへぬらむ

は相手が壽命に限あるものなればこそをかしけれ、山はもとより無生物なれば今の歌は辭のまゝに聞きては何の感もなし。案ずるにこは香具山の山色のかはらぬを即樹木のいつも繁り榮えたるをたゝへたるなり

(わがせこをコチこせ山と人はいへど君も來まさず山の名ならし

吾勢子乎乞許世山登人者雖云君毛不來益山之名爾有之

ワガセコヲはワガ背子ヨといはむが如し(玉緒卷七及古義卷四七一頁)なるミナ

人ヲネヨトノカネハウツナレドのヲにおなじ○第二句は舊訓にコチコセヤマトとよめるを古義にイデコセヤマトと訓み改めて

乞はかならずイデと訓べきことなり。これ余が初て訓出たるなり

といへり。こは卷二(一七八頁)なるコヒタムワガセコチカヨヒコネの乞を契沖のイデに改めたるによれるなれど、なほコチとよむべし。コチコセはコチラへ來タマへといふ意にて巨勢山にいひかけたるなり。コスはクルの敬語なり。俗語にオコシといふコシはやがて是なり○一首の意は

人は此山を呼びて巨勢山といふ。コセ山はワガ背子ヨコチコセ山ときこえてたのもしき名なれど其名におひて君も來まさぬを見ればコセ山といふはただ徒なる山の名なるらし

といへるなり。集中に名ニコソアリケレ、言ニシアリケリなどよめり。間宮永好云は

いづれもノミ、バカリなどの言を省きたるなり

と(犬雞隨筆上卷五八頁)

きぢにこそ妹山ありといへ(△^{タマクシゲ}櫛上)ふたがみ山も妹こそありけれ
木道爾社妹山在云櫛上二上山母妹許曾有來

第三句は一本に櫛上の上に三の字ありといふ。冠辭考及略解には其本の點によりてミクシゲノとよめれど三は玉の誤にてタマクシゲなるべし。はやく冠辭考の頭書に

又思に三は玉の誤か。然らばこれもタマクシゲなり

といへり○二上山は大和國北葛城郡大和河内兩國の界にありて二峯相ならびて今一を雄嶽といひ一を雌嶽といふとぞ。菅笠日記下卷に

又その(○葛城山の北にや、へだたりて二がみ山峯ふたつならびて見ゆ。これも今はニジャウガダケと例の文字のこゑにいひなせるこそにくけれ

とあり。二上は二神の借字にて山に二峯ある謂なり(卷三〇四頁參照)○妹山の名はいにしへは無かりしかど此頃はやく出來たりしなり(卷三三三頁參照)○一首の意は

紀國にこそ妹山といふがありと聞け此二神山にも妹があるよ

といへるなり。元來フタガミ山とは二峯の總稱なるを今は雄嶽をさしていへるなり。案ずるに此歌は妻を喪ひし人のよめるなるべし。さらでは感なし○此歌にはコソ二つあり

詠岳

片をかこのこのむかつをに椎まかばことしの夏の陰に將^{ナラムカ}比疑^カ

片崗之此向峯椎蒔者今年夏之陰爾將比疑

片岡は大和添^{ソラシモ}下郡の地名。ムカツヲは正面の岡なり○將比疑は舊訓にナミムカとよめれどナミムカにては通せず。古義には

比は化の誤にてナラムカにてもあらむか

といへり。此説に従ふべし○契沖のいへる如く喩ふる所ありてよめるなるべし。ナラムカの下に否ナリハセジといふことを補ひてきくべし

詠河

まきむくのあなしの川ゆゆく水のたゆることなく又かへりみむ

卷向之病足之川由往水之絶事無又反將見

河ユのユは後世のヲなり。ユク水ノはユク水ノ如クなり。マタカヘリミムは又立返
リ見ムとなり。卷一(六二頁)に

みれどあかぬ吉野の河のとこなめのたゆることなくまたかへりみむ

又卷六(一〇二六頁)に

みよし野の秋津の川のよろづ世にたゆることなく又かへりみむ

とあると相似たり。○病は痛の誤ならむ

ぬばたまの)よるさりくればまきむくの川音たかしもあらしかもとき

黒玉之夜去來者卷向之川音高之母荒足鴨疾

右二首柿本朝臣人麿之歌集出

ヨルサリクレバは夜ニナレバなり。マキムクノ川は即穴師川なり

(おほきみの)御笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ

大王之御笠山之帶爾爲流細谷川之音乃清也

オビニセルは腰ニマトヘルとなり。川が山の腰をめぐれるなり。○細谷川は固有名
詞にあらず。宜寸川の川上なるべし。○古今集大歌所御歌なる

まがねふく吉備のなか山おびにせる細谷川のおとのさやけさ

は之をなほせるなり。○サヤケサを清也と書けるは卷二にアサツエノゴト、エフツ

エノゴトを朝露乃如也、夕露乃如也と書き卷八にミルガカナシサを見之悲也と書

けると同例なり。以下にも例あり

今敷者見めやともひし三芳野の大川よどをけふ見つるかも

今敷者見目屋跡念之三芳野之大川余杼乎今日見鶴鴨

續日本紀第三十一詔に

今之紀乃間方念見定幸仁

とあり。宣長の解(全集第五の三三三頁)に

之紀は添たる詞と聞ゆ。今之ともいへり。さればこれも上に今乃間とあると同じ
ことなり。萬葉七に今敷者ミメヤトオモヒシこれもただ今者の意なり。本にこの
敷をシクと訓たれどこゝと照してシキと訓べし

といへり。即舊訓にイマシクハとよめるを宣長は續紀の宣命によりてイマシキハに改めてイマハの意とせるなり。此説に従ふべし。されば初二は今ハ再見ムヤハト思ヒシといふ意なり

馬なめてみよし野河をみまくほり打越來てぞ瀧にあそびつる

馬並而三芳野河乎欲見打越來而曾瀧爾遊鶴

馬ナメテは第三句の下におろして心得べし。ウチコエキテは山ヲウチコエ來テなり。瀧は吉野川の早瀬なり

音にきき目にはまだ見ぬ吉野河むつ田のよどをけふ見つるかも

音聞目者未見吉野河六田之與杼乎今日見鶴鴨

第二句は過去にいふべきを現在にいへるなり。卷一八九頁卷二二七一頁卷三三五七六頁及五七七頁等について例を求むべし

かはづなく清き川原をけふ見てはいつか越來て見つつしぬばむ

河豆鳴清川原乎今日見而者何時可越來而見乍偲食

キヨキ川原は卷六一〇三六頁にもヒサ木オフル清キ河原ニチドリシバナクとあり。○見而者のハはかのナガレテハ妹背ノ山ノ中ニオツルのハとおなじき助辭なるべし。君ガ御船ノ綱シトリテバなどの如くタラバといふ意にはあらず。古義にはミテバと濁り訓みて今日見テアラバと譯せり。○一首の意は略解に
今日見て又いつか見んといふ也

といへる如くなるべしと思へど又といふ辭なき爲にきこえがたし。第四句の越の字は又の誤にあらざるか(上なる打越來而曾の越のうつれるにてもあるべし)○シヌバムは賞美セムとなり

はつせ川しらゆふ花におちたぎつ瀬をさやけみと見にしわれを

泊瀬川白木綿花爾墮多藝都瀬清跡見爾來之吾乎

卷六一〇二五頁に

山たかみしらゆふばなにおちたぎつ瀧のかふちはみれどあかぬかも
とあり。シラユフ花は木綿もて作れる花、ハナニのニは後世のトなり。○セラサヤケミトのトは例の省きて見べきトなり。○ワレヲはワレゾといふに近し。上一二三八

頁なるワガセコヲコチコセ山トのヲとは異なり。略解に「卷六サシナミノ國ニイデ
マスマヤワガセノ君ヲといへる類也」といへるは非なり。こはナルヲのヲなり(一一三
三頁参照)

はつせ川ながるるみをのせをはやみゐてこす浪の音のさやけく
泊瀬川流水尾之湍乎早井提越浪之音之清久

ミヲは水路、キデは今のキセキなり。○サヤケクは所謂略辭格にてサヤケクアルヨ
といふ意なり。終止格にてサヤケシといふべき處を連用格にてサヤケクといへる
は辭を略したるなり

さひのくまひのくま川の瀬をはやみ君が手とらば將縁言かも
佐檜乃熊檜隈川之瀬乎早君之手取者將縁言毘

サヒノクマのサは添辭。サヒノクマ、ヒノクマ川といふはなほミヨシ野ノヨシ野ノ
山といふが如し。○結句を略解にヨセイハムカモとよめるを古義にコトヨセムカ
モと改めたり。略解の訓に従ふべし。ソレヲ種トシテ二人ノ中ヲイヒハヤサムカと

なり

ゆだねまくあらきの小田を求めむと足結出所沾このかはのせに
湯種蒔荒木之小田矣求跡足結出所沾此水之湍爾

ユダネは和訓栞に齋種の義なるべしといひアラキは同書に新墾の義なるべしと
いへり。ユダネのユはユザサのユ、ユツイハムラのユツにて數多き意ならむ。○第四
句は宣長の説に出は者の誤にてアユヒハヌレヌなるべしといへり。出は曾の誤に
てアユヒゾヌルルとよむべきならむ。アユヒは袴の裾を結ぶ紐なり。○カハを水と
書けるは夙く卷二(三三三頁)にイシカハを石水と書き卷三(四一四頁)にカハカラシ
を水可良思と書けり

いにしへもかくききつつやしぬびけむこの古河のきよき瀬の音を

古毛如此聞乍哉偲兼此古河之清瀬之音矣

イニシヘモはイニシヘノ人モなり。○シヌブは上(二四四頁)なるイツカ越來テ見
ツツシヌバムのシヌブとおなじく賞美する事なり。略解にシタフと譯せるは非な

り○フルガハは石上イソノカミの布留川フルなるべし

はねかづら今する妹をうらわかみいざいざ河の音のさやけさ

波禰ハネ今為妹乎浦若三去來率去河之音之清左

はやく卷四七七五頁にもハネカヅラ今スル妹ヲと見えたり。その歌の題辭に贈童女歌とあり、こゝにもウラワカミとあれば童女の頭の飾とおぼゆ。額髪を搔上げてその垂れ下るを防ぐ爲に鉢巻やうのものをしけむをいふにや。卷二二七一頁に

たけばぬれたかねば長き妹が髪このごろみぬにかかげつらむか

とあるも今ハ額髪ヲ搔上ゲテハネカヅラシツラムと云へるにや○上三句と第四句の初のイザとは序なり。いざなふ意にてイザ川にいひかけたるなる事略解古義にいへる如し○イザ川は春日山より出でて奈良の市中を西に流れて佐保川に入る小川なり

この小川白氣結瀧キリゾムスベル至八信井ハシリキの上に事上ナガキせねども

此小川白氣結瀧至八信井上爾事上不爲友

第二句は舊訓にキリゾムスベルとよめるを古義に「此方にて雲霧の類にムスブといふことあることなし」といひてキリタナビケリとよめり。案ずるにタナビケリを結とは書くべからず。其上ムスブはムスピノ神のムスピと同じくて物の生ずるをいひて露ムスブなどもいへば霧にもいはれざるにあらじ。さればなほキリゾムスベルとよむべし○瀧至は舊訓にタギチュクとよめり。契沖は

至は去の字を誤れるか。至の字集中にユクとよめる事なし

といへり。古義には落瀧または墮瀧の誤としてオチタギツとよめり。しばらく契沖の説によりて瀧去の誤としてタギチュクとよむべし○第四句は舊訓にハシリキノウヘニとよめるを雅澄は「信字シリの假字に用ひし例なし」といひてハシキとよめれど信をシリの音に借るは平群ヘグのクリの類なれば怪しむべからず。男信上オトノチ卷二十九丁参照。さてハシリキはホトバシル泉といふ事なり。伊豆にハシリ湯とてあるそのハシリに同じ。古義に

いにしへ凡て井と云しは流水にても又穿まうけたるにても清冷にして人の飲料に汲用る處の水をいへりし稱なり

ミナヒトミキトコレヲタレシル

とよみ代匠記には「并人見等は今按ミナヒトミメドと和すべきか」といひ略解には并を淑の誤として

ヨキヒトミキトコヲタレカシル

とよみ古義には人并見管此乎偲吉の誤として

ヒトサヘミツツココヲシヌビキ

とよめり。しばらく略解の説に従ふべし。卷一(四四頁)なる淑人ノヨシトヨク見テヨシトイヒシ芳野ヨク見ヨといふ歌と似通へり

詠露

(ぬばたまの)わが黒髪にふりなづむ天の露霜とれば消乍

烏玉之吾黒髪爾落名積天之露霜取者消乍

消乍は舊訓にキエツツ古義にケニツツとよめり。いづれにても可なり。○フリナヅムは降りて黒髪にとまるなり。○アメノツユジモは卷四(七四三頁)にも久方ノアメノツユジモオキニケリとあり。天より降るものなればアメノといへるなり。卷一(二

二六頁)にもアメノシグレとよめり。ツユジモは露なり

詠花

島廻すと磯にみし花風ふきて波は雖縁とらずばやまじ

島廻爲等磯爾見之花風吹而波者雖縁不取不止

島廻は卷六(一〇五二頁)なる玉藻カルカラニノ島ニといふ歌の島回と共に舊訓にアサリとよめるを古義にシマミに改めたり。こは卷三(四七五頁)なる磯廻を舊訓におなじくアサリとよめるを久老のイソミと改めたるに倣へるなり。げに島廻はシマミとよみて島を廻る意とすべし。○雖縁は舊訓にヨルトモとよめるを古義にヨストモとよめり。こはいづれにてもあるべし。○譬喩歌なるべし

詠葉

いにしへにありけむ人もわがごとかみわの檜原にかざしをりけむ

古爾有險人母如吾等架彌和乃檜原爾挿頭折兼

初二はただ古人モといふ事。ワガゴトカはワガ如クニヤなり。○略解に「さす人あり

てよめるなるべし」と云へるは非なり。下にいふべし○卷四(六二五頁)に
いにしへにありけむ人もわがごとか妹にこひつついねがてすけむ
といふ歌あり

(ゆく川の過去人のたをらねばうらぶれたてりみわの檜原は
往川之過去人之手不折者裏觸立三和之檜原者

右二首柿本朝臣人麿之歌集出

過去は舊訓にスギユクとよめるを契沖は

スギニシ人ともよむべし、上、上の歌にイニシヘニアリケム人といへる人な
り。タヲラネバは再たをらぬなり

といひ略解古義共に之に従へり。案するになほスギユクとよむべし。此處をすぎ行
く人なり。當時はやく人心あだめきて花もなき常葉木ををりかざす事などはせざ
りしなり。作者は古風なる人にて三輪の檜原にかざしを折るとて古人を偲び又檜
原の今は人に折られぬを憐めるなり○ウラブレは卷五(九五〇頁)にも人母禰ノウ
ラブレヲルニとあり。悄然たる事なり

詠蘿

み芳野の青根が峯のこけむしろたれかおりけむたてぬきなしに

三芳野之青根我峯之蘿席誰將織經緯無二

峯を古義にはタケとよめり。舊訓の如くミ、ネとよみてはアヲネのネと重なる故な
り。卷三四七五頁なるキシミガタケも高嶺と書けり○ナシニはナキヤウニといふ
意にはあらでナクテといふ意なり。經ノ絲、緯ノ絲モナクテとなり

詠草

妹がり和我通路のしぬすすきわれし通はばなびけしぬ原

妹所等我通路細竹爲酢寸我通靡細竹原

第二句は舊訓にワ、ガカヨヒチノとあれど然よみては妹ガリトの収まる處なし。妹
ガリトと云はばそれを受くる動詞なかるべからず。されば第二句はワ、ガ、カ、ヨ、フ、ミ、
チ、ノと八言によむべし(古義にも「ワガカヨヒチノと訓ては體言となれば妹ガリト
と云よりのつづきわろし」といひてワ、ガ、ユ、ク、ミ、チ、ノとよめり)○シヌハラは古義に

いへる如くこゝにてはシヌスキ原の意なり(今シノとは細竹を云へど元來シノはしなやかなる物には何にもいふ辭なりき。細竹に限りてシノといふやうになれる今の情を以て古を論ずるなかれ)

詠鳥

山のまにわたるあきさのゆきてるむその河の瀬に浪たつなゆめ
山際爾渡秋沙乃往將居其河瀬爾浪立勿湯目

ヤマノマニのニはユ(即後世のヲ)に通ふニなり。ワタルはトビワタルなり。古義に「常に山際にかよひ渡りてすむ」と譯せるはニを常のニの如く心得たるよりの誤なり。○アキサは今アイサといふ。小鴨の一種なり。○キムはクダリキムなり。

佐保河のきよき河原になくちどりかはづとふたつ忘れかねつも
佐保河之清河原爾鳴知鳥河津跡二忘金都毛

チドリトカハヅトといふべきを上のを略したるはナマヨミノ、甲斐ノ國、ウチヨスル、駿河ノ國トの類なり(卷三九四一及卷五七八九参照)○宣長の

カハヅは蛙にあらず。河津にて千鳥の聲と其處のけしきと二つ也(略解)といへるが非なる事は古義に辨じたる如し。カハヅは今いふカジカなり

佐保河に小驟千鳥夜ぐたちてなが聲きけばいねがてなくに
佐保河爾小驟千鳥夜三更而爾音聞者宿不難爾

第二句は舊訓にアツ、ブ、チドリノとよめるを略解に六言によむべしといひ(げ)にノを添ふべき處にあらず。古義には中山巖水の説に従ひてサヲドルチドリとよめり。案ずるにサヨフケテナガコエキケバとあれば第二句にはまづ晝鳴きし事をいひおくべきなり。されば小を衍字としてサワギシチドリとよむべきか。○イネガテナクニはイネアヘナクニ即寐カヌル事ヨとなり

思故郷

清きせに千鳥つまよび山のまに霞たつらむかむなびの里
清湍爾千鳥妻喚山際爾霞立良武甘南備乃里
甘南備の里は飛鳥の里の中なるべし

年月もいまだ經なくにあすか河せぜゆわたりしいはばしもなし
年月毛未經爾明日香河湍瀬由渡之石走無

初句の前に此處ノ舊都トナリテヨリといふ事を加へて聞くべし○イハバシは略解に「川瀬を渡るべく石を並べおくをいふ」といへる如し。即川瀬の飛石なり○セゼユとあれば一處の石橋にはあらざるなり。さて此歌は前の歌とはちがひて其地に臨みてよめるなり

詠井

おちたぎつ走井水之清有者度者吾者ゆきがてぬかも

隕田寸津走井水之清有者度者吾者去不勝可聞

第二句は略解にハシリキノミヅノとよめるに従ふべし(舊訓ハシリキミヅノ古義ハシキノミヅノ)○第三句は舊訓のキヨケレバと略解古義のキヨクアレバといづれにてもあるべし。クアレバの約カレバを轉じてケレバともいふなり。なほシアリの約はサリなるを轉じてセリといふが如し○度者は略解にワタリハとよみ古義

には者を布の誤としてワタラフとよめれどいづれも従はれず。正宗敦夫いはく。廢者の誤としてオキテハとよむべきかと

あしびなす榮えし君がほりし井のいは井の水はのめどあかぬかも

安志妣成榮之君之穿之井之石井之水者雖飲不飽鴨

アシビは今のボケなり(卷二〇二頁参照)○サカエシとあれば其人は今世に無きなり

詠和琴

琴とればなげきさきさきだつけだしくも琴のした樋につまやこもれる

琴取者嘆先立蓋毛琴之下樋爾孀哉匿有

ケダシクモはモシ或ハといふ意なり○琴ノシタヒは略解に琴の腹のうつろなる處をいふといへり○考に妻を失ひたる人の歌とせり

芳野作

神さぶる磐根ごごしきみよし野のみくまり山をみればかなしも

神左振磐根已凝敷三芳野之水分山乎見者悲毛

カムサブルは神サビタルにて太古ノといふほどの意なり。コゴシキはゴロゴロトシタルとなり。サガシとは異なり。○このカナシは古義にいへる如くオモシロシなり。例は古義を見よ。○ミクマリ山は宣長の菅笠日記に今子守の神のまします山にて子守はミクマリを御子守となまり更に略して子守といふやうになれるなりといへり

皆人のこふる三吉野けふみればうべもこひけり山川きよみ

皆人之戀三吉野今日見者諾母戀來山川清見

ウベモコヒケリはウベモ皆人ハコヒケリとなり。この山川は山と川となり

いめのわだことにしありけりうつつにも見てこしものをおもひしおもへば

夢乃和太事西在來寤毛見而來物乎念四念者

イメノワダは吉野川の淵の名なり。はやく卷三四三八頁に見えたり。○コトニシア

リケリは名バカリヂヤといふ意。古義に「夢のわだといへばただ夢にのみ見る處かと思ひしに云々」と釋せる。よろし。○オモヒシオモへバは見テ來ムト一心ニ思へバとなり。古義に「今つくづく思へばと云なるべし」といひてコトニシアリケリにかゝれるやうに釋けるは非なり。ミテコシモノヲにかゝれるなり

すめろぎの神の宮人冬暮菰(トコ)いやとこ敷(シク)に吾(ミタ)かへりみむ

皇祖神之神宮人冬暮菰葛彌常敷爾吾反將見

第三句は舊訓にサネカヅラ六帖にマサキヅラとよめるを記傳卷二十九第二の一七二六頁に田中道麻呂の説を擧げてトコロヅラとよむべしといへり。トコシクニにかゝれる枕辭なり。○敷を舊訓にも略解にもシキとよみたれど副詞とおぼゆれば記傳の傍訓の如くトコシクニとよむべし。○スメロギノ神は卷一以下に屢見えて御代々の天皇の御事なり。ミヤ人は即大宮人なり。トコシクニは永久ニなり。○結句の吾は又亦などの誤字にあらざるか。果して然らば一首の主格は宮人なり。よし野川石迹柏等ときはなす吾はかよはむよろづ世までに

能野川石迹柏等時齒成吾者通萬世左右二

イハトカシハトは集中難義の一なり。まづ契沖は景行天皇紀の故事(本書五〇九頁に引けり)によりてカシハを岩の事として「イハトガシハは岩門岩ガシハにて岩ある河門の岩なり」といひ宣長は「石常磐イハトカシハなり。イハをシハといふは稻をシネといふに同じ」といひ(略解)守部は「磐常堅イハトカシハ磐」といふことの約まれる也」といへり(鐘の響六十二丁)またイハトカシハトのトは古義に

トは與なり。さて石ノ常磐ト共ニの意なり

といへり。いづれの説も穩ならず。就中宣長の「石常磐イハトカシハなり」といへるは雅澄もうべなひたる説なれども、しトカシハが常磐の意ならば上なるイハは無くてあるべし。又常磐はトキハとこそいへれトコシハといへる例なし。又トコシハのトはカに轉ずべからず。宣長は又「イハをシハといふ」といへり。こは堅磐をカタシハといふ(雄畧天皇紀に堅磐此云柯陀之波とあり。又和名抄筑前國穗浪郡の下に堅磐加多之方とあり)を思へるならめど堅磐をカタシハといふはカタシイハの畧にて(カタシといふ語いにしへはウマシ、オホシなどと同じくカタシ、カタシキとはたらきしなり)磐を

シハといふにはあらず。とまれかくまれカシハは守部のいへる如くカタシハの約轉なり(カタシハの約カチハを轉じてカシハといへるなり)但守部がイハトを磐常の意としたるは従はれず。案するにイハトカシハトのト(下なる)はテニヲハにはあらでイハトカシハトは石門堅磐イハトカシハ門にてイハトもカシハトも同事なるを辭の文に重ねいへるにあらざるか。こはいづれの説も穩ならざるによりて試にいふのみ。もし此説の如くならば初二はトキハナスの序辭なり。○略解古義にはトキハナスをも枕辭としたれどこは主文中の辭にて卷五(八六七夏)なるトキハナスカクシモガモトオモヘドモのトキハナスとおなじくてトキハニといふに齊し

山背作

うぢ河はよどせなからしあじろ人舟よばふこゑをちこちきこゆ

氏河齒與杼湍無之阿自呂人舟召音越乞所聞

古義に水の淀む處を淀瀬といふなるべしといへり。卷十七に

かみつ瀬に、うち橋わたし、余登瀬には、うき橋わたし云々

とあるを見ればヨドセは古義にいへる如く水の淀める瀬にて早瀬のうらとおぼ

ゆ。さてヨドセナカラシは徒涉スベキ淀瀬ガナイサウナといふ意なり。古義に「網代
かまふるに宜き淀瀬のなき故にあるらし」と釋せるは従はれず。○アジロ人は網代
を構へて魚を取る人なり。○ヲチコチは下なるヲチコチノイソノ中ナルシラ玉ヲ
のヲチコチとおなじくしてソコラといふ事なり。遠近數處の謂にあらず。○無之は無
の下に有を脱せるかと契沖云へり

うぢ河におふる菅藻を河はやみとらず來にけりつとにせましを

氏河爾生菅藻乎河早不取來爾家里裏爲益緒

菅藻は仙覺抄に

菅に似たる河藻なり。人のくふ物といへり

といへり。○結句の前にモン出來ル事ナラバといふことを補ひて聞くべし。セマシ
ヲとあればなり

うぢ人の譬のあじろ吾在者今齒王良増木積不來友

氏人之譬乃足白吾在者今齒王良増木積不來友

老玉と世

譬はタトヒとよむべし。結句の木積は集中に許都美とも書けり。樹木を製材したる
屑なり。宣長は吾を君の誤とし略解には王を興來を成の誤とせり。雅澄は此等の説
によりて

うぢ人のたとひのあじろきみしあらば今はよらましこつならずとも

とよめり。コツとよめるは卷十四にナルセロニ木都ノヨスナス云々とあるにより
てなり。さて

歌意は宇治の里人が事とある時はやゝもすれば物の譬喩に取りてかにかくに
いふなる其宇治川の網代を守る人の中に君があるぞならば木積ならぬ吾も譬
へば木積の如くにその網代木を慕ひて今は依かゝらましと一すぢに思へる謂
ならむ

といへり。案ずるに王を去の誤とし吾と來とはもとのまゝにて

うぢ人のたとひのあじろわれならば今は去らましこつみこすとも

とよむべく元來宇治人の信ある譬として人の語り傳ふる所網代に木積の流れ來
るまで待たむと契りて終に身うせきなどいふ尾生尾生の故事物語ありけむに據りてよ

めるならむ。イマハは歌を作りし時をいへるにあらず。木積の流れ來むを待ち待ちし後を指せるなり。○或は云はむ。去は集中ユクまたはイヌとよみてサルとよめる事なしと。答へて云はむ。卷四(七三〇)夏に枕片去イメニミエコシとあり。又春去者、夜去來者など書けるも去を當時サルともよみしによりてハルサレバ、ヨルサリクレバのサルに借れるにあらずやと

うぢ河を船わたせをとよばへどもきこえざるらしかぢの音も不爲
氏河乎船令渡呼跡雖喚不所聞有之楫音毛不爲

略解にワタセヲはワタセヨといふに齊しといへり。○不爲を舊訓、略解、古義共にセズとよめるはわろし。セヌとよむべし。セヌハを畧せるなり

(千早人)うぢ川浪をきよみかもたびゆく人のたちがてにする
千早人氏川浪乎清可毛旅去人之立難爲

二三は宇治川浪ガキヨサニカとなり。タビユク人は旅人なり。タチガテニスルは去リアヘズスルとなり。ガテニは不致なり

攝津作

(しなが鳥)ゐな野をくれば有間山
一本云猪名の浦廻をこぎくれば夕霧たちぬ宿はなくして
志長鳥居名野乎來者有間山夕霧立宿者無爲

一本云猪名乃浦廻乎榜來者

略解に「一本はヤドハナクシテといふにかなはざればわろし」といへり。○猪名野は今伊丹の附近なり。有馬は其西方に當れり。西下の途にてよめるなり。卷三(三八二)夏なる

いづくにかわれはやどらむたかしまのかち野の原にこの日くれなば
と相似たり

武庫河の水尾急嘉あか駒のあがく激にぬれにけるかも
武庫河水尾急嘉赤駒足何久激沾祁流鴨

初句を古義にムコノカハとよめり。なほ舊訓の如くムコガハノとよむべし。○第二句は舊訓にミヅヲハヤミカとよめるを古義に嘉を三等の二字の誤としてミヅヲ

ハヤミトとよめり。案ずるに嘉を三加の誤とし水尾をミヲとよみその下にテニヲハのヲをよみそへてミヲヲハヤミカとよむべし。雅澄は「ハヤミカとよみてはと、のひがたし」と云へれどミヲヲハヤミカにて切れたりと見ればと、のはざることなし。○アガクは馬の前脚を下すは物を搔寄するに似たればいふ。○激は舊訓にソソギとよめるを古義にタギチに改めたり。之に従ふべし。駒ノ足搔ニセカレテ激スル水ニといふ意なり。○卷十七に

うさかがはわたる瀬おほみこのあが馬のあがきのみづにきぬぬれにけり
といふ歌あり

いのちを幸久吉(石流)たるみの水をむすびてのみつ

命幸久吉石流垂水水乎結飲都

宣長の説に吉は在の誤なりといへり。石流は卷八に垂見の枕辭に石激と書けるを見ればこゝも石激とありしを誤れるかと古義にいへり。いづれにもあれサキクアラムトイハバシルとよむべし。○垂水は瀧なり。三註共に攝津國豊島郡の地名としたれど従はれず。卷十二に

石走垂水の水のはしきやし君にこふらくわがこころから

とあり。○此歌は名水を飲めば無病なりといふ俗信によれるなり。今も残れる俗信なり

さよふけてほり江こぐなる松浦船楫の音たかし水尾はやみかも

作夜深而穿江水手鳴松浦船楫音高之水尾早見鴨

松浦船を契沖は肥前の松浦の船なりと云へり。松浦式の船なり。眞熊野の船伊豆手船の類なり。○結句は古義に「水派の流の急きに逆ひてこぎ浜るが故にかあるらし」と釋せる如し

くやしくもみちぬるしほかすみの江の岸の浦回ゆゆかましものを

悔毛満奴流盪鹿墨江之岸之浦回従行益物乎

ウラミュは浦ニ沿ウテなり。例の如くモシ出來ル事ナラバといふことを補ひてきくべし。○古義に

かくては岸の方に行がたし沙の干たる内に岸の裏めぐりに行て岸の風景を愛

神名帳 攝津國 豊島郡 毛水神社 (名水大月次常)

仁徳紀 十一年 冬十月 掘宮北土 石引南水以入西 園以号其水曰掘江

べかりしものをとなり。汐の満来て面白き住吉の岸の方を行がたきを悔るなりといへるは岸ノウラミといふことを心得たがへたるなり。岸ノウラミは岸下の曲浦なり。いにしへ住江の海邊は斷崖を成したりしなり。而してその斷崖漸く浪に侵されてめざましき粘土層を露はしたりしかば渚より仰見て

白浪の千重にきよするすみの江の岸のはにふにほひてゆかな(卷六一〇四) すみの江の岸のはにふをみむよしも(次下)

馬なめてけふわが見つるすみのえの岸のはにふを萬世に見む(次下) など歌ひしなり

妹がため貝を拾ふとちぬの海にぬれにし袖はほせどかわかず
爲妹貝乎拾等陳奴乃海爾所沾之袖者雖凉常不干

今長解不四最余云
慎於曝涼(謂曝、
陽乾也涼者風涼也)
者

チヌノ海は和泉攝津兩國に亘ると契沖のいへる如し

めづらしき人乎吾家にすみのえの岸のはにふを見むよしもがも
目頼敷人乎吾家爾住吉之岸乃黄土將見因毛欲得

初二は序なれど人ヲスミとかゝれる不審なり。乎は与の誤にあらざるか。卷八にもおなじ誤とおぼゆる處あり(ノコレル雪乎マガヘツルカモ)○メヅラシキはメデタキなり。卷三(三四九頁)にハル草ノイヤメヅラシキワガオホキミカモ、卷五(九〇二頁)に人毎ニヲリカザシツツアソベドモイヤメヅラシキウメノ花カモとあり○住吉の岸の黄土生ははやく卷一(一一〇頁)卷六(一〇四二頁及一一一二頁)に見えたり。ハニは粘土、ハニフは粘土の存する處なり

暇あらばひろひにゆかむ住吉の岸によるとふ戀忘貝

暇有者拾爾將往住吉之岸因云戀忘貝

結句は忘貝といふ貝の名に戀ヲ忘ルといふことをいひかけたるなり

馬なめてけふわが見つるすみのえの岸のはにふをよろづ世にみむ

馬雙而今日吾見鶴住吉之岸之黄土於萬世見

見飽かぬ餘に萬世もいきながらへてしばしば來り見むと願へるなり○黄土の下の於はヨロヅヨニのニに借れるなり。下にもオクヤマノ於石コケムシ、於君ニルク

サトミシヨリなど書けり

すみのえに往云道にきのふみしこひ忘貝ことにしありけり

住吉爾往云道爾昨日見之戀忘貝事二四有家里

往云ははやく契沖が往去の誤としてユキニシとよめるに従ふべし○一首の意は

昨日戀忘貝ヲ見シガヤハリ妻ノ事ノ忘ラレヌヲ思ヘバ戀忘貝トイフハ名バカ

リナリケリ

といへるにてはほ古義にいへる如し。略解に「住吉のけしきのわすられぬと也」といへるは契沖の誤解を繼げるなり

すみのえの岸に家欲得おきにへによする白浪みつつしぬばむ

黒吉之岸爾家欲得奥爾邊爾縁白浪見乍將思

家欲得は古義にイヘモガとよめるに従ふべし(略解にはイヘモガトよめり)○シ

ヌバムは賞美セムとなり

大伴の三津の濱邊をうちさらし因來浪のゆくへしらずも

大伴之三津之濱邊乎打曝因來浪之逝方不知毛

大伴ノを從來枕辭としたれど上田秋成の説に従ひて地名とすべき事上(一二三二

頁)にいへる如し○ウチサラシは略解にアラフといふに同じといへり○因來は從

來ヨセクル(舊訓古義又はヨリクル(略解)とよめり。ヨセとヨリとはいづれにても可

なれど來は必コシとよむべし。ヨリ來テカヘリシ浪ノといふ意なり。こなたへ寄來

る浪にはユクヘシラズモといふべからざればなり

梶の音ぞほのかにすなる一云ゆふさればあまをとめおきつ藻荇に舟出す

らしも

梶之音曾髣髴爲鳴海未通女奥藻荇爾舟出爲等思母

一云暮去者梶之音爲奈利

すみのえの名兒の濱邊に馬立て玉拾ひしく常わすらえず

住吉之名兒之濱邊爾馬立而玉拾之久常不所忘

名兒は今の大坂市の内なり○立の字一本に並とありといふ○玉ヒロヒシクは玉

ヲ拾ウタノガ又は玉ヲ拾ウタ事ガと譯すべし。玉ヒロヒシにクの添へるなり。このクの事は卷四(八〇一頁)にくはしくいへり

雨は零^{フル}かりほはつくるいつのまに吾兒^{アゴ}の塩干に玉はひろはむ

雨者零借廬者作何暇爾吾兒之塩干爾玉者將拾

零を舊訓にフルとよめるを古義にフリと改めたれど古今集秋下に

秋は來ぬもみちは宿にふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

とあるに准じてなほフルとよむべし。○吾兒は略解に

住吉のナゴをアゴともとなへしにや。次にも阿胡とよめり

といへり。○雨ハ、カリホハといひて更に玉ハといへるはわざとハを重ねたるなり

奈吳の海の朝開^{アサケ}のなごり今日もかも磯のうら回^{ウラマエ}にみだれてあらむ

奈吳乃海之朝開之奈凝今日毛鴨磯之浦回爾亂而將有

朝開は從來アサケとよめり。さて略解古義に「朝潮の引たる餘波也」といへれど朝潮の引きたるなごりをアサケノナゴリとはいふべからず。案ずるに朝開は潮干の誤

字にや。再案するに次に朝ノシホヒをアサケノシホと云へるを思へばなほアサケノナゴリにて朝ノ鹽干ノナゴリを略してアサケノナゴリと云ひならひしにや。○ナゴリは三註共に餘波の意としたれど實はただ殘といふことにてこゝなどは潮の干て魚介海藻の湯に残れるをいへるなり。くはしくは卷六一〇八七頁以下に云へるを見べし

すみのえの遠里小野の眞^{マコト}榛^{ハシ}以^モすれるころもの盛^{モトメ}すぎ去

住吉之遠里小野之眞榛以須禮流衣乃盛過去

トホザト小野は中世の瓜生野にて今の墨江村なりといふ(大日本地名辭書。記傳卷二十三全集第二の一四三八頁に

攝津國住吉郡に遠里小野村と云ありて今現にヲリヲノといへば萬葉七又十六に住吉之遠里小野之とある今本の訓は誤にてヲリノヲヌノと六言によむべきなり

といへるはいかが、遠里と書ける文字につきて後にヲリとよむやうになれるならむ(中世ウリノ野といひしはそのヲリ小野を訛まりしにこそ)○舊訓に以をモテ、去

をユクとよめるを古義にモチヌルに改めたり。之に従ふべし。○サカリスギヌルは衣の色のあするなり

ときつ風ふかまく不知阿胡の海の朝明のしほに玉藻かりてな

時風吹麻久不知阿胡乃海之朝明之留爾玉藻荊奈

トキツ風はさし潮に伴なふ風なりといふ(一〇七〇頁参照)○不知を略解古義共にシラニとよめり。さて初二を略解に「汐時の風の吹んもしらねば」と釋し古義に「潮時の風の吹むと云心がかりもなしに」と釋せり。案ずるにこは潮時ノ風ノ吹來ムモ知レズイザ其風ノ吹來又間ニといへるなり。さればシラズとよみて第二句にて切りて心得べし。卷六一〇七〇頁にも

時つ風ふくべくなりぬかしひ瀉しほひのうらに玉藻かりてな

といふ歌あり○正宗敦夫いはく。アサケノシホは朝ノシホ干なり。今もいふ辭なりと

すみのえのおきつ白浪風ふけば來よする濱をみればきよしも

住吉之奥津白浪風吹者來依留濱乎見者淨霜

フケバはキヨスルにかゝれり。一誦して調のわるきはフケバとミレバと重なれる爲なり

すみのえの岸の松が根うちさらし縁くる浪の音の清羅

住吉之岸之松根打曝縁來浪之音之清羅

清羅は舊訓に従ひてサヤケサとよむべし。羅は紗などの誤か(卷十にアラヤギノイトノ細紗とあり)○上(一二七二頁)に

大伴の三津の濱邊をうちさらしよりこし浪のゆくへ知らずも

といふ歌あり

難波がた留干にたちて見わたせば淡路の島にたづわたる見ゆ

難波方塩干丹立而見渡者淡路島爾多豆渡所見

羈旅作

家さかり旅にしあれば秋風のさむきゆふべに雁なきわたる

離家旅西在者秋風寒暮丹雁喧渡

タビニシアレバは旅ニアルニなり。卷二二七六頁なる春鳥ノサマヨヒヌレバなどと同格なり

まとかたの湊のすどり浪立巴妻よびたてて邊にちかづくも

圓方之湊之渚鳥浪立巴妻唱立而邊近著毛

圓方下カは伊勢國多氣郡にあり。今の東黒部なり。○渚鳥ハは洲にゐる鳥なり。○略解考に第三句の巴ハを也の誤としてナミタテヤとよめり。類聚古集に也とあれば略解の説に依るべし。タテヤはタテバヤなり。○ヨビタテテは喚催シテなり

あゆちがた塩ひにけらし知多の浦に朝こぐ舟もおきによるみゆ

年魚市方塩干家良思知多乃浦爾朝撈舟毛奥爾依所見

古義に「知多浦は年魚市潟に隣れるなるべし」といへれど歌の調によればアユチガタは廣くチタノウラは狭くてアユチ潟のうちにチタノ浦はこもれるに似たり。○オキニヨルは沖ノ方ヘトホザカルなり

塩ひれば共鴻爾出なくたづのこゑとほざかる磯回すらしも

塩十者共滷爾出鳴鶴之音遠放磯回爲等霜

第二句を略解にトモニカタニイデ古義にトモニカタニデとよみて古義に「鶴が己が友率イひて共に潟に出てと云ふなり」といへり。案ずるに共は干の誤とおぼゆ。さればヒガタニイデテとよむべし。○磯回は舊訓にアサリとよめり。卷三四五七頁にいへる如くイソミとよむべし

ゆふなぎにあさりするたづ塩みてばおき浪たかみ己妻喚

暮名寸爾求食爲鶴塩満者奥浪高三己妻喚

結句は舊訓に従ひてオノガツマヨブとよむべし。契沖はオノヅマヲヨブとよみ雅澄はオノヅマヨブモとよめり

いにしへにありけむ人のもとめつつ衣にすりけむ眞野のはり原

古爾有監人之覓乍衣丹摺牟眞野之榛原

モトメツツはオノヅカラナラデコトサラニとなり。卷十なるワガ衣スレルニハア

ラズ高松ノ野邊ユキシカバハギノスレルズとうらうへなり○結句はソノ眞野ノハリ原カ、ココハといへるなり。卷一(二八頁)なるタチテ見ニコシイナミ國原と同格なり○ハリは萩なり。上(一二五三頁)にもイニシヘニアリケム人モワガゴトカ云々といふ歌あり

あさりすと磯にわがみしなのりそをいづれの島のあまか將刈ツギハ
朝入爲等磯爾吾見之莫告藻乎誰島之泉郎可將刈

略解にいへる如く女をナノリソにたとへたるにて旅の歌には入れがたし○將刈を三註共にカルラムとよみたれど未來の事をいへるなればカリナムとよむべしけふもかもおきつ玉藻は白浪の八重をるがうへにみだれてあらむ

今日毛可母奥津玉藻者白浪之八重折之於丹亂而將有

契沖は

第四の句は、、、いくへも浪のたゝめるを云へり

といひ略解には

ヤヘヲルはいやをりしく意也。浪は物を折かへすさまに見ゆるものなればいへるならん

といひ古義には

浪の彌重ヤヘに折返すその上にと云なり

といへり。案ずるにヲルは折の意の轉じてタタムの意となれるなり。否此歌及古今集なる沖ニヲレ浪などは復已動詞として用ひたるなればタタマルの意とすべし。

但他動詞として用ひたる例もあり○アラムはアルラムにおなじ。上(一二七四頁)にもイソノウラミニミダレテアラムとあり

近江の海みなと者ハヤソヂ八十ヤソヂいづくにか君が舟はて草むすびけむ

近江之海湖者八千何爾加君之舟泊草結兼

第二句は舊訓にミナトハヤソヂとよめるを略解に

周防守康定主○濱田侯松平氏宣長の門人萬葉八重疊の著ありの考に者は有の誤にてミナトヤソアリ也とあり。、、此説によるべし

といひ古義に

千賀眞恒、者字は有の誤歟と云り。此説いはれたり

といへれどなほ舊訓に従ふべし。○君ガ舟ハテは君ガ、舟ヲ駐メテなり。君ガ舟とつづけるにあらず。こゝのハツは自動詞とはおぼえず。○草ムスビケムを略解に

草を結ぶは旅行道の標なり。いづれの湊に船著ていづくの道を行らんと旅行人をおもひてよめる也

といへり(古義同説。案ずるに卷一(二二頁)にイハシロノ岡ノ草根ヲイザムスビテナ、また卷十二に

妹ガ門ゆきすぎかねて草むすぶ風ふきとくな又かへりみむ

とあるを思へばいにしへ無事ならむ呪に草を結びしなり(卷六一一五 参照。このクサムスブを近世の歌人は草枕の事と心得たるめり。卷五(九五七頁)なるタマホコノ、道ノクマミニ、草タヲリ、シバトリシキテとあるはげに野に臥すさまなれど野に臥すことをクサムスブといへる例なし

ささなみのなみくら山に雲るれば雨ぞふるちふかへりこ吾背

佐左浪乃連庫山爾雲居者雨曾零智否反來吾背

ナミクラ山は近江滋賀郡なる山の名とはしるけれど今の何山にか明ならず。○千蔭は

家にとどまれる妻の歌なるべし

といひ雅澄は

家にとどまれる妻のおもひやりてよめるなるべし

といへり。二氏ははげだし奈良にてよめる歌とせるにか。果して然らば余の思ふ所と同じからず。ササナミノナミクラ山ニ雲キレバといへる、その連庫山の見やらるゝ處にてよめる調なる上に雨ゾフルチフカヘリコワガセといへるも暫時にして家に歸らるゝ程の處にゆきたりとせではかなはず。されば妻も夫に従ひて近江にありしにて妻を旅宿又は船中におきて夫の數時間程の處に行きたりし程によめるなり

大御舟はててさもらふ高島の三尾の勝野のなぎさしおもほゆ

大御舟竟而佐守布高島之三尾勝野之奈伎左思所念

大御舟は天皇の御舟なり。○サモラフは風のしづまるを待つなり。卷六一〇(五四頁)

にも

風ふけば浪かたたむとさもらひにつたの細江に浦がくりをり
とあり○勝野は今の溝溝なり。略解に

和名抄近江高島郡三尾郷あり。同郡角野といふもあり。按に角野いにしへカド野
といひしにや。さらば此勝野はそこなるべし

といへるは非なり○ナギサシオモホユは卷一(一七頁)なるウヂノミヤコノカリホ
シオモホユの類にてソノ渚ノオモシロカリシ事ガ忘レラヌとなり。古義に

此歌は近江國へ行幸ありしほど京にて思ひやりてよめるなるべし

といへるは非なり。從駕の人の後によめるなり○第二句はサモラヒシといふべき
を言數に制せられてサモラフといへるなり。此例上にも多し

いづくにかふな乗しけむ高島の香取の浦ゆこぎ出來船

何處可舟乘爲家牟高島之香取乃浦從已藝出來船

來を古義にコシとよみ改めたるは中々にわろし。もとの如くクルとよむべし

斐太人の眞木ながすとふにふの河ことは通へど船ぞかよはぬ

斐太人之眞木流云爾布乃河事者雖通船曾不通

ヒダ人はこゝにては木工をいへるなり。いにしへ飛驒の國人は木工に巧なりしか
ば木工の事を打任せてヒダ人といふやうになりしなる事前註に云へる如し○丹
生川は吉野山より發し宇智郡に入りて吉野川に注げり○略解に

これは譬喩歌なるべし。旅の歌にてまのあたり見るさまならば眞木流ストフと
はよむべからず

といひ難波江卷一上百家説林續編下一の五六三頁に

此萬葉の歌は相聞の歌にて羈旅の歌にあらず。旅の歌にあらぬよしは橘千蔭の
略解にもはやくいへり

といへるは非なり。丹生川に臨みてよめるなれど眞木を流すさまは人言にきゝた
るのみにて目のあたり見しにあらねば眞木ナガストフといへるなり○さて川幅
はさばかり廣からねばあなたの岸と言語は通へど急流なるによりて渡船は通は
ぬなり。略解に

其河は眞木流すによりて舟のかよはぬを云々

といへるはあしく心得たるなり○古義はよく心得ながらなほ譬喩歌とせり。コト
ハカヨヘドといへるが相聞めきて聞ゆるのみ。譬喩歌にはあらず

(あられふり)鹿島の崎を浪たかみすぎてやゆかむこひしきものを
霞零鹿島之崎乎浪高過而夜將行戀敷物乎

常陸の鹿島なり○スギテは寄ラズニなり。卷六(一一八五頁)なる

まそかがみみぬめの浦はも船のすぎてゆくべき濱ならなくに

のスギテにおなじ。但今は浪が高く船が寄せられぬなり。古義に

其崎に留り居ること叶はずしてこぎ放れてや行むとなり

といへるは非なり○コヒシキは常の意即みまほしき事なり。古義に『メダタキモノ
ヲと云むが如し』といへるはスギテヤを誤解せる餘波なり

足柄の宮根とびこえゆくたづのともしきみれば日本ヤマトしおもほゆ
足柄乃宮根飛超行鶴乃乏見者日本之所念

トモシキはメヅラシキなり。略解にマレニと譯せるは非なり。卷三(四五七頁)なる

こしの海のためひの浦を旅にしてみればともしみやまとしぬびつ

に似たり。旅の空にてめづらしき物を見るにつけても故郷人の偲ばるゝなり。古義
に『我もあのごとく京の方へ行たきことぞとらやましくして云々』と譯せり。トモ
シをウラヤマシの意と見たりとおぼゆ。ユクタヅヲ見レバトモシミとあらばこそ
然はうつさめ○日本は大和の借字なり

(夏麻なまひく)うながみがたのおきつ洲に鳥はすだけど君は音もせず

夏麻引海上瀆乃奥津洲爾鳥者簀竹跡君者音文不爲

契沖いへらく

上總にも下總にも海上郡あれども此は上總なり。第十四東歌の中の上總國歌に
上句今の歌と全同なるあり。此にて知べし

といへり。間宮永好(天鷲隨筆上卷五一頁)も上總國海上郡の海濱なりとして

抑此海濱には洲埼いと多かるをその洲埼を浦より見れば遙に遠く見やらるゝ
からオキツスとは呼べるなりけり。此海濱はすべて瀆のみにてかの奥津洲にも
なほ瀆ありて種種の貝つもの多かれば鳥も常にいみじく群集へり

といへり。上總の海上郡は今の市原郡のうちなり○スダクは卷十一に多集と書け

る如く集る意なれどこゝは集り鳴く意に用ひたり○君ハオトモセズは君ノ聲ハ
キコエズとなり。こは海上瀟を行く人のよめるにて君とは契沖のいへる如く故郷
なる妻を指せるなり。略解に

旅行君は音信もせぬといふ也

といひ古義に

旅行し君はすべて音信もせずいかなりけむおぼつかなしとなり

といひて海上瀟なる女のよめりとせるは非なり

若狹なる三方の海の濱きよみいゆきかへらひ見れどあかぬかも

若狹在三方之海之濱清美伊往變良比見跡不飽可聞

イユキカヘラヒのイは添辭卷六(一一八三頁)にも

しらまなご清き濱へはゆきかへりみれどもあかず云々

とあり○三方の海は湖水なり。名義の事は伴信友の若狹舊事考(全集卷五の二〇五
頁)に見えたり

印南野はゆきすぎぬらし一云しかま江は(あまづたふ)日笠の浦に波たてり

みゆ

印南野者往過奴良之天傳日笠浦波立見

一云思賀麻江者許藝須疑奴良思

日笠浦は今の播磨國印南郡大鹽村及曾根町の附近なるべし。推古天皇紀に見えた
る赤石、檜笠、岡は今の太田と曾根との間なる日笠山なり。之を赤石、檜笠岡といへる
は今の印南郡以東はいにしへの明石國なればなり○結句の浪立所見はナミタテ
ルミユとはよまでナミタテリミユとよむべし(卷三五三頁ミダレイヅミユ参照)或は
ナミタチテミユとよむべきかとも思へど下に浪立有所見とも書けり○底本によ
れば西下の海路にてよめるにて一本に依れば東上の時によめるなり。シカマ江は
飾磨川の河口なり

家にしてわれはこひむないなみ野の浅茅がうへにてりしつく夜を

家爾之氏吾者將戀名印南野乃浅茅之上爾照之月夜乎

家ニシテは家ニ歸リテノ後ニなり。テリシは今を後よりいへるなり(契沖)○此歌は

陸路東上の時のなり

ありそこす浪をかしこみ淡路島みずやすぎなむここだ近きを
荒磯超浪乎恐見淡路島不見哉將過幾許近乎

ミズヤは見ズテヤなり。ココダは俗語のタイサウなり。古義にソコバク間遠ニアラ
ズと譯せるはココダの意を了解せざるなり。〇上二八六頁なる

あられふり鹿島の崎を浪たかみすぎてやゆかむこひしきものを
と相似たり

朝霞やまずたなびく龍田山船出せむ日は吾こひむかも

朝霞不止輕引龍田山船出將爲日者吾將戀香聞

ヤマズはツネニなり。第三句以下はコノ龍田山ヲ浪華ヨリ船出セム日ニワガ戀ヒ
ムカとなり

あま小船帆かもはれると見るまでに鞆の浦回到浪たてりみゆ

海人小船帆毳張流登見左右荷鞆之浦回二浪立有所見

浪にはタテリといはでタツといふべきなれば浪立有所見の有は衍字かとも思へ
ど下に

粟島にこぎわたらむと思へどもあかしのとなみいまだ佐和來

又卷九に

うちたをり多武の山ぎりしげみかも細川のせに波の驟サガ留ル

とあり。これも本來サワグとあるべきなり

好去而またかへりみむますらをの手にまきもたる鞆の浦回を

好去而亦還見六大夫乃手二卷持在鞆之浦回乎

初句は舊訓にヨクユキテとよめるを略解に「義を以マサキクテと訓べし」といひ古
義も之に従へり。案ずるにサキクユキテとよむべし。卷五なる好去好來歌の結尾九
七四頁にツツミナク佐伎久伊麻志豆ハヤカヘリマセとあればなり。さてサキクユ
キテは無事ニ往キテなり。〇三四は鞆の序なり

(鳥じもの)海にうきゐておきつ浪さわぐをきけばあまたかなしも

鳥自物海二浮居而奥津浪驂乎聞者數悲哭

ウミニウキキテは船ニ乗り居テなり

朝なぎに眞梶こぎでて見つつこし三津の松原浪ごしにみゆ

朝菜寸二眞梶擲出而見乍來之三津乃松原浪越似所見

マカデは兩側の艦なり。マは片に對する語なり

あさりするあまをとめらが袖とほりぬれにしころもほせどかわかず

朝入爲流海未通女等之袖通沾西衣雖干跡不乾

上一二七〇頁にも

妹がため貝を拾ふとちぬの海にぬれにし袖はほせどかわかず

といふ歌あり

あびきするあまとやみらむ飽浦の清きありそを見にこしわれを

網引爲海子哉見飽浦清荒穢見來吾

右一首柿本朝臣人麿之歌集出

飽浦を略解に卷十一にキノ國ノ飽等ノ濱ノとあるによりて四言にアクラノとよみたれどなほアクウラノと五言によむべし。アクウラといひしをつづめてアクラとも云ひしのみ。○玉勝間卷九「紀の國の名所ども」といふ條に

飽等濱は海士郡賀田浦の南の方に田倉崎といふ所ある是なりと里人のいひ傳へたりとぞ

とあり。加太田倉は共に和泉界に近き地なり。○卷三三六二頁に

あらたへの藤江の浦にすすきつるあまとか見らむ旅ゆくわれを

とあると相似たり。○上の見の上に將をおとしたるか

山こえて遠津の濱の石つつじ迄吾來ふふみてありまて

山越而遠津之濱之石管自迄吾來含而有待

第三句を雅澄はイソツツジとよみたれどなほ舊訓の如くイハツツジとよむべし

(卷二二四頁参照)○第四句は舊訓にワガキタルマデとよめるを雅澄は吾を返の誤としてカヘリコムマデとよめり。げに次下に見えたる

足代すぎていとかの山のさくら花ちらすあらなむ還來萬代

と照し合するにカヘリ、ク、ル、マ、デとあるべし(さて古義の如くカヘリ、コ、ム、マ、デとよまむも可なれど卷十五にタカシキノウラミノモミヂワレユキテカヘリ久流マデチリコスナユメとあればカヘリ、ク、ル、マ、デとよみて可なり)○遠津の濱は紀伊の地名なるべしといふ○初句はいづくにかけて見べきか。契沖は

遠津と云ための枕詞歟。又山コエテクルマデと句を隔て、つづくるか

といひ宣長は遠にかゝれる枕詞とし雅澄は『第四句の上に移して心得べし』といへり。案ずるに今の歌とかの足代スギテといふ歌とは全く同想同格にて一は他を模したりと見ゆ。さてその足代スギテは足代スギテユク絲鹿ノ山ノ云々といふべきを畧して足代スギテイトカノ山ノといへりとおぼゆる理由あり(其歌の處にていふべし)。されば今の山コエテも山コエテユク遠津ノ濱ノ云々といふべきを畧して山コエテトホツノ濱ノとはいへるなり。然るにユクといふ動詞は語格上必要なる語にて常の文辭にては之を畧すべからざること言ふを待たず。ただ枕詞の時にはシラ浪ノヨスル濱といひ大船ノ泊ツル津といひシラ菅ノ生フル眞野といふべきヨスル、ハツル、オフルを畧してシラ浪ノ濱松ガエノ(卷一頁五)オホ船ノ津守ノ占ニ

(卷二五頁)といひシラスダノ眞野ノハリ原(卷三一頁)といへる如く必要なる語を略することあり。さらば山コエテは枕詞と認むべきかといふにもし山コエテを枕詞とせば足代スギテも枕詞とせざるべからず。前に云へる如く二首は全然同格なればなり。然も山コエテを枕詞とせる宣長もおそらくは足代スギテを枕詞とするに憚らむ(足代は地名なり)。されば山コエテは打任せて枕詞とはいふべからず。もし強ひて名稱を附すべくば一種の准枕詞といふべし

大海にあらしなふきそ(しながどり)るなのみなとに舟はつるまで

大海爾荒莫吹四長鳥居名之湖爾舟泊左右手

猪名は今海より遠けれどいにしへは海深く彎入して湊をなし、なり

舟はててかしふりたてて廬利爲名子江の濱邊すぎがてぬかも

舟盡可志振立而廬利爲名子江乃濱邊過不勝鳧

カシは舟を繋ぐ杙なり。今船をつなぐ處をカシといふは語意の轉せるなり(和訓栞)。

河岸の文字を當つるよりカハギシの中略と思はむは非なり○フリタテテのフリ

は添辭なるべし。但卷二十なる家持の歌には杖を建つる事をカシフルとよめり。○
廬利爲の三字を略解にイホリセムとよめるを古義には名を上ニに附けてイホリセ
ナとよみ子江の江を瀉ハの誤としてコガタとよめり。略解の訓に従ふべし。さて名子
江を契沖は

越中國射水郡に名子江はあれども此歌は前後のつづきを見るに名子の海にて
津國の名所なるべし

といひ又

仙覺も攝津と註し好忠もスミ吉ノナゴエノ岡とよめり

といへり○スギガテヌは過ギ敢へヌなり

(妹が門出入乃河之瀨速見吾馬爪衝家思良下
妹門出入乃河之瀨速見吾馬爪衝家思良下)

第二句は舊訓にイデイリノカハノとよめるを略解にイを省きてデイリノカハノ
とよめるはあさまし。さて略解に卷九にイモガ門入出見川ノトコナメニとあるに
據りて此歌の出入乃河を入出見河の誤とせるは従はれず。古義に

もし本のまゝならば入野河なるを集中にフル山をヲトメラガ袖フル山とよめ
る類にて枕詞の連ツギによりてかく云るなるべし

といへり。げにイデイリ河といふ河の名ならばことさらに乃を挿みてイデイリノ
河ノとは云はじ。されば妹が門イデイリをイリノ河にいひかけたるなり。さてイリ
ノ川ならば入野川にてイリヌ川とよむべきを乃の字を借り用ひたるはいかにと
いふに卷五にハルノ能ニキリタチワタリ。卷十四に信濃ナルスガノアラ能ニ。卷十
八に夏ノ能ノサユリヒキウエテとありて當時はやく野をノともとなへしこと明
なれば古義の説の如く誤寫とするには及ばず。卷五七九〇及卷六七一〇九 參照。入野は
山城國なるべし。○結句の思一本に戀とあるは次の歌よりうつれるなるべし。思に
ても通せざるにあらず。現に卷九に家念良武可とあり。イヘモフラシモは家人ガ我
ヲ思フサウナとなり。卷三なる

しほつ山うちこえゆけばわがのれる馬ぞつまづく家こふらしも

の處(四五五頁)を參照すべし。○セヲハヤミは瀨ガ早キニと譯すべし。卷六(一〇二六
頁參照)此種のミにサニと譯すべきと、キニと譯すべきとの別あることを知らで悉

くサニと譯せむとするより瀬が早き爲に馬がつまづくと云へるにか家人が思ふ爲に馬がつまづくと云へるにかとまどはるゝなり。古義に

この渡る川の瀬が急き故に吾乗れる馬のつまづきてなづむにや、いや家人にこひしく思はるれば乗れる馬のつまづくことありといへば家人の吾をこひしく思ふ故なるらし云々

と釋けるは適に右の惑に陥れるなり

(白栲にほふ)まつちの山川に吾馬なづむ家こふらしも

白栲爾丹保布信土之山川爾吾馬難家戀良下

シロタヘニニホフの八字はマツチの枕辭又は序なり。山の名のマツチは眞土に通ひ其眞土は白色を帯びたるものなればかくは云へるなり。○ナヅムはユキナヤムなり。前の歌と相似たり

せの山にただにむかへる妹の山ことゆるせやもうち橋わたす

勢能山爾直向妹之山事聽屋毛打橋渡

宣長いへらく(玉勝間卷十二全集第四の二七五頁)

紀國の伊都郡橋本驛より四里ばかり西に背山村といふ有て其村の山ぞ即背山なりける。いとしも高からぬ山にて紀の川の北の邊に在て南の方の尾崎は川の岸まで迫れり。村は此山の東面の腹にあり。大道は川岸の彼尾崎のやゝ高き處を村を北に見てこゆる云々

といへり。今和歌山縣伊都郡の西端に紀川を挟みて北に背山、南に妹山といふあり。背山は適に宣長のいへるに當れり。妹山も亦果して古歌殊に本集の歌に見えたる妹山とすべきか。げに契沖の勝地吐懷篇上卷に

紀の川を隔て、兄山は北に、妹山は南にあり
といへり。然るに宣長は

さて又川の南にも岸まで出たる山有て背山と相對ひたればこれや妹山ならむともいふべけれど其山は背山よりやゝ高くて山のさまも背の山よりをゝしく見えて妹山とはいふべくもあらず。其上河のあなたにて大道にあらず越ゆる山にあらざれば妹ノ山セノ山コエテといへるにもかなはざるや(同卷全集二七六頁)

といひ、終に斷案を下して

とにかくに妹山といへるはただ背の山といふ名につきての詞のあやのみにていはゆる序、枕詞の類にぞありける(同上)

といひ又

妹山といふは兄山あるにつきてただ設けていへる名にて實に然いふ山あるにはあらじとぞ思ふ(卷九全集二一三頁)

といへり。案ずるに卷三(三九一頁)に

たくひれのかけまくほしき妹の名をこのせの山にかけばいかにあらむ一云からかむあ

とあるを見れば當時までは妹山といふ山無かりし事明なり。然るに卷四(六七頁)に

おくれゐてこひつつあらずば木國の妹背の山にあらましもものを

此卷に

木ぢにこそ妹山ありといへ云々(二二四〇頁)

せの山にただにむかへる妹の山ことゆるせやもうち橋わたす

妹にこひわがこえゆけばせの山の妹にこひずてあるがともしさ

人ならば母のまな子ぞあさもよし木の川の邊の妹とせの山

吾妹子にわがこひゆけばともしくもならびをるかも妹とせの山

卷十三に

妹の山せの山こえて云々

などあるを見れば此頃には既に妹山といふ山の出来たりしなり。思ふにセノ山のセは元來夫の意にはあらざりけむを夫の意としそれに對して或山を妹山と呼びそめしにこそ。さて其山は

せの山にただにむかへる妹の山ことゆるせやもうち橋わたす

とあるを見れば背山と一溪流を隔てたる山とおぼゆ(もし紀川の如き大河を隔て

たる山ならばウチ橋ワタスとは云はじ)。また木ノ川ノヘノ妹トセノ山といひナラ

ビヲルカモ妹トセノ山といひイモノ山セノ山コエテといへるを見れば背山と相

並びて紀川の北岸にあるなり。或は云はむ。北岸に相並べりとすればセノ山ニタダ

ニムカヘル妹ノ山とあるに合はざるにあらずやと答へて云はむ。北岸に相並べりとせむに南面より見てはナラビアルカモ妹トセノ山といふべく兩山の中間にしてはタダニムカヘルといふべし。又難じて云はむ。現に古今集にはナガレテハ妹背ノ山ノ中ニオツル吉野ノ川ノ云々とありて紀川を隔てたる山としたるにあらずやと答へて云はむ。こは宣長の

すべて歌に名所をよめること其處に到りて見たる様をよめるなどこそ後世のといへども據とすべきはあれ。さらぬ戀の歌などによめるはいにしへのもただ古き歌によめることを取りてあやにしたること多ければ多くは其名所の考の證にはなりがたきわざなるを云々(玉勝間卷九全集四頁)

といへる如く兩山紀川の南北に相對せりといふ證とはしがたし。

因にいふ。宣長が

古今集なるナガレテハの歌は、ヨシヤと重ねん料に紀の川を同じ川なればヨシノ川ともよみなせるものなり(同上)

といへるは所謂妹背の山のあたりに身をおきてよめりとせるにて従はれず。こ

は流レテ紀國に到リテハ妹背ノ山ノ中ニオツル此吉野川ノ云々といへるにて身を吉野川のはとりにおきてよめるなり。又吉野ナル妹背ノ山ノなど後世の歌によめるも右の歌を誤解してのわざなり

さて背山の隣山を妹山といひしは都人の私に名づけしにて其山の本名にあらねば(別に土人の呼びし名あるべし)行はるる事久しからずして絶えしにこそ。されば妹山の所在は萬葉の歌について求むべく土人に就いて尋ねむは愚なる事なり○コトユルセヤモは古義に

夫のいざあはむと云言を妹のゆるしうけひげばにやと釋して男ノ言ヲ許スの意としたれど續紀第九詔に此事いざせといざなふによりていざせむとことば許して

とあるは言ニハ許シテの意なればこゝも女ガ言葉ニ許セバニヤといふ意とすべし。即コトユルスといふ動詞と認むべし○ウチハシワタスはワタセリの意なり。即相逢フ設ニ移橋ヲ渡シテアリとなり

木の國のさひがの浦にいでみればあまのともしび浪間オミ從所見

木國之狹日鹿乃浦爾出見者海人之燈火浪間從所見

サヒガは雜賀なり。結句は古義にナミノマユミユとよめるに従ふべし(舊訓はナミマヨリミユ)

麻ごろも著者なつかし木の國の妹背の山に麻蒔わぎも

麻衣著者夏櫛木國之妹背之山二麻蒔吾妹

右七首者藤原卿作。未審年月

略解に

宣長云。ナツカシは俗に云とは異にて、したしくむつまじき意也。吾も麻衣を著てあれば麻まく妹よ縁ありてむつまじくおもはるゝといふ也。といへり

己がさきに妹背山を往しほど其山に麻蒔し妹が目につきてうるはしかりしが今わが麻衣を取著ぬればいとどかの麻蒔居し妹が面影の思ひ出られてなつかしく慕はしと云へるなるべし

といひて著者キレバをケレバと改訓せり。雅澄の説の如くば却りてキレバとあるべく宣長の説の如くば寧ケレバとあるべし。ケレバはキタレバといふことなればなり(卷十五にコノアガ家流イモガコロモノアカヅク見レバとあり又上一五頁二三にカタミノ衣ワレ下ニ著有とあり。はやく記傳卷二十八一六七頁一六七にも著キテアル而有を古言にケル流と云レといへり。さて今は著者をケレバとよみ、一首の意は宣長の解釋に従ふべし。○麻蒔は麻刈の誤ならむ。麻の實を蒔くは目につくわざにあらねばなり。○契沖いはく藤原卿といへるは藤原北卿と云へる北の字の落たる歟。大織冠ならば内大臣藤原卿と云べし。藤原卿とのみ云ひては南卿北卿わかれず。南卿は武智麻呂なり。武智麻呂は和歌に不堪なりける歟。集中一首もなければ北卿なるべしとは云なりといへり。北卿は房前サキなり

つともがと乞はばとらせむ貝拾ふ吾をぬらすなおきつ白浪

欲得イテ褻登乞者令取貝拾吾乎沾莫奥津白浪

家人ノツトモガナト乞ハバ取ラセムソノ貝ヲ拾フ吾ヲといふ意なり。古義に

己が濱邊に出て貝を拾へば沖つ浪も褻ツツもがな欲しきとて此貝を取むと打縁來
るらむもし褻ほしくは汝にも取らせむぞ吾をば沾すことなけれ沖つ白浪よと
云るなるべし

といへるは従はれず。トラセム貝とつづきたるを古義にはトラセムにて切りて心
得たるなり。貝の下にヲといふ辭なき爲に一層きゝまどはるゝなり

手取トル之ガからに忘るとあまのいひし戀忘貝言にしありけり

手取之柄二忘跡磯人之日師戀忘貝言二師有來

初句を舊訓にテニトリジとよめるを古義にテニトルガと改めたり。之に従ふべし。

テニトルガカラニは手ニ取ルママニとなり。卷六(一一四九頁)に

ふるさとは遠くもあらずひとへ山越ユカガ我カ良爾ラおもひぞわがせし

又卷十四にニハニタチ惠麻須我可良爾とあり。例とすべし。〇四五は上一二七二頁
なる

すみのえにゆきにし道にきのふみし戀わすれ貝ことにしありけり
と全く相同じ

あさりすと磯にすむたづあけゆけば濱風さむみおの妻よぶも

求食爲跡磯二往鶴曉去者濱風寒彌自妻喚毛

上一二七九頁なる

ゆふなぎにあさりするたづ塩みてばおき浪たかみおのが妻よぶ

と相似たり

藻苅舟おきこぎくらし妹が島かたみの浦にたづかけるみゆ

藻苅舟奥撈來良之妹之島形見之浦爾鶴翔所見

古義に

藻を刈舟の沖の方より漕來るらし。其舟に驚きたりと見えて云々

と釋ける如し。〇カタミは今の加太なりといふ。妹が島形見ノ浦と二つの地名を並
べ擧げたる相互の關係は如何。妹が島ト形見ノ浦トといふ意か。妹が島ナル形見ノ
浦といふ意か。参考の爲先哲の説を見むと思ふに代匠記、略解考、古義共に更に言へ
る所なし。案するに妹が島と形見ノ浦と相近き二つの地の名の上にて縁なきに

あらねば妹が形見といふやうに聞えて妹ガシマをカタミノ浦の枕のやうにつかへるにて鶴の翔るは形見の浦なり。さればイモガシマの五言は准枕辭と認むべし。古今集賀部なるかの

しほの山さしでの磯になく千鳥君が御代をばやちよとぞなく
といふも今と同例なり

吾舟はおきゆなさかり向舟ムカヒヅナかたまちがてり浦ゆこぎあはむ

吾舟者從奧莫離向舟片待香光從浦撈將會

オキユのユは例のニにかよふユなり(卷三 三六七頁及 卷五 五八四頁参照)略解に沖ヨリナコギ行ソと譯せるは非なり○向舟を略解には舊訓に従ひてムカヘブネとよみ古義にはムカヒブネとよみて「迎舟なり」と釋けり。古義の説に従ふべきか。卷十八にはまべよりわがうちゆかばうみべよりむかへもこぬかあまのつりぶねとあり○カタマツは專待のうらにて傍待の意なり。卷十にも梅のはなさきちる苑にわれゆかむ君が使をかたまちがてりとあり。古義に「偏に待よしなり」といへるは余の説と正反對なるが下にガテリとい

ふ辭を添へたるを見ても偏待の意にあらざるを知るべし○ウラユコギアハムは浦ニ沿ウテ漕行合ハムとなり

大海のみなぞことよみたつ浪の將依ヨラムともへる磯のさやけさ

大海の水底豊三立浪之將依思有磯之清左

上三句は序なり。將依を古義にヨセムとよみ改めて吾舟ヲコギ依セムト思ヘル磯ノ云々と譯せり。げに船ヲ寄セムといへるにてはあれどフネヲといはでヨセムとはいふべからず。さればなほ舊訓の如くヨラムとよむべし

ありそゆもまして思へや玉の浦離ハナレ小島シマのいめにしみゆる

自荒磯毛益而思哉玉之浦離小島夢石見

アリソユモは荒磯ヨリモとなり。オモヘヤは思へバヤにてそのヤとミユルと照應せるなり○玉ノ浦は玉勝間卷九(全集第四の二一六頁)に

那智山の下なる粉白浦といふところより十町ばかり西南にあり。離小島といへるは玉の浦の南の海中にちりちりに岩あればそれをいへるなるべし

やも

奥津波部都藻纏持依來十方君爾益有玉將緣八方

一云奥津浪邊波布敷緣來登母

一云のシクシクは頻ニなり。第三句の依來また緣來はヨリクとよみ結句の將緣はヨセメとよむべし

栗島にこぎ渡らむと思へども赤石の門浪トナミいまださわげり

栗島爾許枳將渡等思鞞赤石門浪未佐和來

栗島は卷三(四五〇頁)にも卷四(六三八頁)にも見えたり。記傳卷四(全集第一の二二二頁)に

淡路の西北に在島と見えたり

といへり。卷四なる丹比真人笠麻呂下筑紫國時作歌(六三六頁)に

ただむかふ淡路をすぎ栗島をそがひにみつ云々

とあるを見ればげに宜長の云へる如くなるべし。されど今それに當る島なし。はや

247635

く海底に陥りしにや。今淡路の岩屋浦なる小島をアハシマといふ由なれど本集によめるはそれにはあらず。雅澄の萬葉集名所考に「讚岐の海中にあり」といへるは地理にかなはず。アカシノ門は卷三にもアカシ大門ニ入ラム日ヤ(三六四頁)アカシノトヨリヤマト島ミユ(三六五頁)とあり。以上十四首(キノ國ノサヒガノ浦ニ以下)は元曆校本等に依れば次なるイモニコヒ以下十五首(タマツ嶋ミレドモアカズまで)と顛倒せる如し

妹にこひわがこえゆけばせの山の妹にこひずてあるがともしさ

妹爾戀余越去者勢能山之妹爾不戀而有之乏左

契沖が「妹ニコヒズテとは妹山に指向ひてあればなり。落句のトモシサは羨シサなり」といへる如し

人ならば母のまな子ぞ(あさもよし)きの川のへの妹とせの山

人在者母之最愛子曾麻毛吉木川邊之妹與背之山

妹トセノ山といへるは妹山背山を併稱せるなり。かゝる時には妹ト背トといひて

背の下にもトを附するが本則なれど集中には下のトを省ける例ある事既にいへる如し(八九七頁参照)○さて今は二山を夫婦にたとへずして兄弟にたとへたるなり。マナゴは本に最愛子と書けり。古義に「かくあるは言の意を得たる書様なり。略解にマナゴは眞子なりと云るは大ろかなり」といへり(卷六七頁一三参照)

吾妹子にわがこひゆけばともしくもならびをるかも妹とせの山
吾妹子爾吾戀行者乏雲並居鴨妹與勢能山

コヒユクはコヒツツ行クなり。このトモシも羨マシなり

妹があたり今ぞわがゆく目のみだに吾に見こそことどはずとも
妹當今曾吾行目耳谷吾耳見乞事不問侶

略解に「メノミダニは目ニノミのニを省けり」といへるは非なり。目は主格なり。さてそのメは古義に「ミエの縮りたる言にてこゝは妹ガ容顔ナリトモと云なり」といへり。見を舊訓にミエとよめるを古義にミセに改めたり。舊訓に従ふべし○略解に按に此歌はただ戀の歌にて心明らかきを妹とあるを妹山の事と見誤りてこゝ

に載せたりと見ゆ

といへる如し

足代^{アテ}すぎて絲鹿の山の櫻花不散在南還來萬代

足代過而絲鹿乃山之櫻花不散在南還來萬代

足代を舊訓にアシロとよめるを宣長は

持統紀三年八月云々紀伊國阿提郡云々また續紀大寶三年の所に阿提同紀天平三年の所に阿氏と見ゆ。是今の在田郡也。されば此足代はアテとよむべし。糸鹿は在田郡に今も有

といへり。代をテとよめる一例は新撰姓氏錄大和國皇別の處に

井代^キ臣、居大和國添上郡井手村因負姓井代^キ臣

とある是なり。今の歌にマデを萬代と書けるも代をテに借れるなり。然るに考には

代は太か打を誤る歟。又代にてもダイのイを略きてダとよむべし

といひ黒川春村(碩鼠漫筆二八頁)は

足代は次の歌に安太部去とある安太に同じく紀伊國阿提郡の郷名英多とある

地なるべし。足代、阿提續紀、阿氏同、安諦、後紀等をアテとおぼえたる人もあめれど、さては安太部とあるに協はず。かつ此郡名は英多の郷名より出たらむ事決く又在田と改名せられたるもアタなればこそ打あひては聞ゆれ。アテにては頗不合なるべし。提氏、諦等をタの假字とせしは太伊の吳音の省呼なり。○採要といへり。案ずるに日本後紀に

大同元年秋七月戊戌、改紀伊國安諦郡爲在田郡以詞涉天皇諱也

とあり。こは安諦といふ郡名が平城天皇の御諱安殿とおなじきが故に改められしなり。

春村は此御諱をもアタとよみて

安殿をアタとは讀がたきに似たれど上件に辨ふる如く郡名のアタなるに合せてしかよまざれば理り協はず。按ふに殿の古音は多奴なるべければ省呼して多の假字ともしつべし

といへれど疑問中なる郡名に合せて御諱の訓を改定すべからざるは言を待たず

又弘仁七年の太政官符、日本書紀通釋第五の三八五〇頁に引けり。に高野山の四至の事を云へる處に當河又阿手河とありといふ。このアテ河は今の有田川の上流なり。されば足代はなほアテとよむべし。或は云はむ。次下の歌に安太部とある安太とこゝの足代と同一の地なるべきを一をアタとよみ一をアテとよまむこといか。答へて云はむ。安太もアテとよむべし。其事は其歌の處にて云ひてむ。或は又云はむ。和名抄紀伊國在田郡の郷名に英多あり。やがて此歌の足代、次下の歌なる安太なりとおぼゆ。足代、安太をアテとよむべくば英多もアテとよむべきか。否さはよまれじと。答へて云はむ。英多はアタとよむべし。但もとはアテなりしを大同元年の郡名のアテをアリタと改められし時郷名のアテをアタと改められしならむ。天皇の御諱に通へりとして郡名を改めながら郷名をさしおくべきにあらねばなり。さて御諱のアテに通へるを忌まば郡名も郷名とひとしくアタと改めて然るべきをアリタとしも改めしは如何。此につきてもすこし考へし所あれどなほ考へ定めていふべし。○この歌のアテは郡の名にあらで郷の名なり。古義に「さらずは絲鹿山も在田郡の内なればアテスギテとは云べきに非じ」といへり。○イトカ山は玉勝間卷九全

集第四の二一二頁に

糸鹿山は熊野の道の坂にてこれも在田郡なり。北の麓に糸我の里又糸我王子社
といふも有とぞ

といへり○第四句は古義にチラズアラナムとよめるに従ふべし(舊訓及略解には
モを添へてチラズモアラナムとよめり)○結句は古義にカヘリコムマデとよめれ
ど卷十五に

たかしきのうらみのもみぢわれゆきてかへり久流までちりこすなゆめ

といへる例あれば舊訓のまゝにカヘリクルマデとよむべし○初二の續おぼつか
なし。古義に「一五二三四と句をついでて見べし」といへるは従はれず。下に安太へユ
クラステノ山ノマキノ葉モとあると参照するに足代スギテユクイトカノ山とい
ふべきユクを略せるなり。さてそのユクは常の文辭にては略すべきにあらねばア
テスギテは一種の枕辭(准枕辭)と認むべき事上一二九四頁なる山コエテトホ津ノ
濱ノイハツツジといふ歌の處にいへる如し

名草山ことにしありけり吾戀ちへの一重もなぐさめなくに

名草山事西在來吾戀千重一重名草目名國

名草山は紀伊國名草郡(今海部郡と合せて海草郡といふ)にあり。紀三井寺の上方な
る山なりといふ○卷六一〇七三頁なる

名のみを、名兒山とおひて、吾戀の千重の一重も、なぐさめなくに
と辭句相似たり○第三句は舊訓にワ、ガ、コ、ヒ、ノとよめるを古義にワ、ガ、コ、フ、ルに改
めたり。卷四と卷十三とに吾戀流チヘノヒトヘモとあり。卷六には吾戀之チヘノヒ
トヘモとあればいづれにてもあるべし○ナグサメナクニは慰メヌカナ、慰メヌコ
トヨなどいふ意なり。第二句に返るにあらず

安太へゆくをすての山の眞木の葉も久しく見ねばこけむしにけり

安太部去小爲手乃山之眞木葉毛久不見者蘿生爾家里

安太は郷名にて和名抄なる英多なり。その英多は大同以前にはアテといひけむこ
と上にいへる如し。さるをこゝに安太と書けるは誤寫にやと云ふに集中に太をテ
に借れる例あればものまゝにてアテともよむべし。その例とは卷十、七夕歌のう
ちなるワレハ干可太奴アハム日マツニまた卷十二正述心緒のうちなる五十殿寸

太ウテウウキ眉根メノヲといふ歌どもなり。字音辨證下卷二〇頁に五十殿寸太といふ歌を掲げて

略解に太は天の字の誤なるべしとあれど各本同じければ誤に非ず。太をテと呼は同轉の藝をゲ世をセ蔽をへ、曳をエの假字としたる事古書に多くありて此轉の吳音古くは第四音に呼びしとみゆれば今此例とすべし

といへり○ヲステは玉勝間卷九全集第四の二一五頁に

小爲手の山は在田郡山保田庄に推手村といふあり。これか。其村は伊都郡の堺にて山の奥なり

とあり。今安諦村(こは新村名なるべし)の大字に押手といふ處ありとぞ○眞木ノ葉といへるはただ眞木なり。葉に意なし。なほサカキを榊葉といふが如し(神垣ノミムロノ山ノサカキ葉ハ神ノミマヘニ茂リ合ヒニケリなど)さて眞木は檜なり。コケはただの苔なり。略解に日かげのかづらなりといへるはわろし。ヒカゲは樹上に生ふるものにあらず○此歌は伊都郡より在田郡に越ゆる山路にてよめるにて作者は久しき前に此處を通りし事あるなり

玉津島よく見ていませ(あをによし)平城ヘイなる人の待問はばいかに
玉津島能見而伊座青丹吉平城有人之待問者如何

四五は若ヨク見テイマサズバ平城人ノ待問ハムニイカガ答へ給ハムとなり(契沖)しほみたばいかにせむとか方便ヘン海之神我手渡ウツルあまをとめども

塩満者如何將爲跡香方便海之神我手渡海部未通女等

普通の海は潮満ちても渡るに惱ましきことなし。潮の満ちて渡るに惱ましきは迫門トなり。されば第四句の神我手は迫門の事ならざるべからず。こゝに契沖は

第十六に黄染乃屋形神之門渡とよめり。第十三にサカトヲ過テとサカトを坂手とかけり○こはなほサカテとよむべし。然れば今も神ガトワタルと讀て門渡と意得べきか

といひ雅澄は

按に手は戸ト字の誤なり。さて戸は借字にて神ガ門トなり。十六の末怕ヒヤ物モノ歌にオキツ國シラセル君ガ染屋形黄染ノ屋形神カミ之門ト渡とよめる神之門に同じ

といへり。此等の説に従ひてカミガトとよむべし。但手の字は戸の誤にあらで等な
どの誤なるべし。さてそのカミガトを古義に

凡て神とは何にまれいとかしこきものを云名にてこゝは海上の波荒くて甚恐
き所と云るなり

といへれどカム門などいはで神ガ門といへるを見れば普通名詞にはあらで地名
なり。即神ノ御坂(卷九及卷二十)神ノ渡(卷十三)などの類なり。○カミガ門の地名なる
上は方便海も亦海の名ならざるべからず。從來之をワタツミノとよみて契沖は

方便海とかけること其意を得ず。もし諸大龍王等は諸佛菩薩の善權方便なるも
多ければ其意にてかけるにや

といへれど雅澄は契沖の別説を引けり。前述の如く海の名として別に訓を求めざ
るべからず。案ずるに方便海は方丈海の誤字なるべし。方丈は又丈室といひて維摩
居士の石室の方一丈なりしに基づける熟語にて一般に室の意に用ひたり。されば
方丈海はムロノウミノとよむくムロノウミは牟婁ノ海にて牟婁は紀伊國の郡名
なり

或は云はむ。孟子に食前方丈侍妾數百人とある。方丈は室の義にあらず。室の義な
る方丈は釋氏要覽に唐の顯慶年中王玄策といふ者勅によりて西域に往きし時
維摩居士が示疾の遺址を訪ひし事を記して疊石爲之、玄策躬以手版縱横量之得
十笏、故號方丈といへり。唐の顯慶年中は皇國の齊明天皇の御時に當れり。奈良時
代の文士果してはやく右の故事を知りたりしかおぼつかなしと。答へて云はむ。
釋氏要覽の説の正否は余の知る所にあらねど奈良時代の文士は既に維摩方丈
の故事を知れり。たとへば本集卷五なる山上憶良の悲傷死妻作詩の序(八四〇
頁)に所以維摩大士在乎方丈有懷染疾之患とあり。又同人の悲歎俗道假合即離易
去難留詩の序(九八四頁)に所以維摩大士疾玉體于方丈とあり。又經國集群書類從
卷百廿五なる淡海、三船の聽維摩經詩に演化方丈室、談玄不二門とあり。されば本
集の撰者がムロに方丈を宛てたるは訝るに足らず

玉津島見てしよけくも吾は無しみやこにゆきてこひまくもへば

玉津島見之善雲吾無京往而戀幕思者

結句の戀幕を略解にコハマクとよめるはわろし。ヨケクモはヨキ事モなり。代匠記

以下にいへる如くあまりの面白さに後日思の種とならむことを恐れたる趣なり
黒牛の海くれなるにほふももしきの大宮人しあさりすらしも
黒牛乃海紅丹穗經百磯城乃大宮人四朝入爲良霜

玉勝間卷九(全集第四の二一一頁に)

黒牛潟は今は黒江といひて若山の方より熊野に物する大路にて黒江干潟、名高
とつぎつぎに相つらなりて三里ミサトいづれも町づくりて物うる家しげく立つづき
にぎは、しき里共なり。皆入海のほとりにて氣しきよし。黒江などは山にもかた
かけたるところなり。此わたり昔は名草郡なりしを今は海士郡といへり。此紀の
國の或書に此黒江の磯べに昔いと大きにて色黒き石の牛の形したるがありて
潮みてばかくれ干ぬれば顯れけるをいつの頃よりかやうやうに土に埋れゆき
て見えずなりぬるを一とせ里人どもあまたちて掘顯はさむとせしかど大き
にして遂に得掘出さで止みぬるを今はそのあたりまで里つづきて彼石は民の
家の地の下にある由記したり

とあり。即今の黒江の舊名なり。略解に「今黒瀬といふ處なり」といへるは誤れり。〇ク

レナキニホフは赤ク見エルとなり。古義に「女房等の裝束の海面に映るを云り」とい
へる如し。〇大宮人は無論宮女たちなり

若の浦に白浪たちておきつ風さむきゆふべはやまとしおもほゆ
若浦爾白浪立而奥風寒暮者山跡之所念

四五は卷一(一〇六頁)なる葦邊ユク鴨ノハガヒニ霜フリテといふ歌の四五と同じ
妹がため玉を拾ふときの國のゆらのみ埼に此日くらしつ

爲妹玉乎拾跡木國之湯等乃三埼二此日鞍四通

ユラノミサキは日高郡なる由良なり

わが舟の梶はな引きそやまとよりこひこし心いまだあかなくに
吾舟乃梶者莫引自山跡戀來之心未飽九二

カヂハナヒキノを略解に

櫂をあらゝかにつかふをカヂ引ヲリと集中に多くよめるに同じ

といひ古義に

梶をとりて船をこぐは引撓むるやうなれば引と云り。楫引折などよめるに同じといへり。案ずるにカヂヒクは今艚ヲ押スといふに同じ。カヂは今の艚にて押しては引くものなればいにしへはヒクといひ今はオスといふなり。かのカヂヒキヲルは強くかちを押すことにてただヒクといふとは異なり(卷二七三頁参照)。さて今は船ヲヤラデシバシ停メヨといへるなり

玉津島みれどもあかずいかにしてつつみ持ゆかむ見ぬ人のため
玉津島雖見不飽何爲而褻持將去不見人之爲

第四句の持は古義に従ひてモチとよむべし 旧モチ

(わたの底)おきこぐ舟を邊によせむ風もふかぬか波不立而

綿之底奥己具舟乎於邊將因風毛吹額波不立而

邊ニ寄セム風とつづけて心得べし。フカヌカは吹ケカシなり。結句は古義にタテズシテとよめるに従ふべし(舊訓はタタズシテ)

大葉山霞たなびきさよふけてわが船はてむとまり知らずも

大葉山霞蒙狹夜深而吾船將泊停不知文

カスミといへるは夜霧なり。大葉山の所在考へがたし

さよふけて夜中の方におほほしくよびしふな人はてにけむかも

狹夜深而夜中乃方爾鬱之苦呼之舟人泊兼鴨

オホホシクは陰氣ニなり。○夜中を宣長は度中の誤字とせり。トナカは古事記高津宮段の歌にユラノトノ、トナカノ、イクリニ云々とありて傳卷三十七(全集第四の二二二三頁)に

トナカノは門中之なり。凡て水門、島門、追門などの門は船の出入る口にてその海を云なり。されば門中とはその海上を云なり

といへり。こゝに又一説あり。即守部山彦冊子卷一の四十一丁は其門人書上勝智といふもの、説を助けて近江の地名とせり。勝智の説に「高島の東方にまさしく夜中といふ地ありときけり」といへり。案ずるに卷九に高島作歌二首と題して

高島の阿渡河波はさわげども吾は家もふやどりかなし
たびなれば三更刺而てる月の高島山にかくらくをしも

古義 大葉山
ハハヤは物ミ
伊とさませあり
さよふけ

とあり。その三更刺而を舊訓にヨナカヲサシテとよめり。サシテといへるを思へば古義にいへる如く地名のやうに聞ゆ。さらば守部雅澄の説に従ひてヨナカは近江の地名とすべきか。返りて思ふに勝智は「高島の東方にまさしく夜中と云地ありとさけり」といへれど今近江にさる地名ある事を聞かすげに温故録といふ書(大日本地名辭書に引けり)に「夜中は高島郡なり」とあれどそは本集卷九の歌によりていへりとおぼゆれば證とはしがたし。其上三更ヲサシテといへる。もし地名とせば作者は高島山より東方にあるにてヨナカは高島山より西方にありとせざるべからず。山より西にある地は山より東にある人に見ゆまじきにその見えざる地を擧げてヨナカヲサシテテル月ノとはいふべきにあらず。又地名殊に普く人の知らざる地名を三更など物遠き借字を以て書くべきにあらず。更に思ふに卷九なる三更刺而の刺は誤字にてもあるべし。とまれかくまれヨナカを地名とする説は守部雅澄の擧げたる證のみにては成立せず。さればしばらく宣長の度中の誤字とせる説に従ふべし。但トナカは門中なりといふ説について一言せざるべからず。古書に用ひたるトといふ語には海峡又は渡津の意なると航路の意なると二つある如し。而して

トナカのトは追門河門などのトにはあらでアマノ原トワタル光卷六一〇(九)アマノ川トワタル船ノ古今集雜上などのトに齊しかるべし

神前^{ミサキ}ありそもみえず浪たちぬいづくゆ行かむよきぢはなしに

神前荒石毛不所見浪立奴從何處將行與奇道者無荷

初句は舊訓にミワノサキとよめるを古義にはカミノサキとよめり。卷三三七六頁クルシクモフリクル雨カの處にていひし如くなほミワノサキとよむべし。〇四五はヨケ道ハ無クテセムスベモナキニイツコヲカトホリ行カムといへるなり

磯にたちおきべを見ればめかり舟あまこぎづらし鴨^{カヅ}かけるみゆ

磯立奥邊乎見者海藻荇舟海人撈出良之鴨翔所見

鴨^{カヅ}とかけるは鶴の誤にあらざるか。上にも

藻かり舟おきこぎくらし妹が島かたみの浦に鶴かけるみゆ

とあり。又卷四七〇二頁なる小松ガシタニタチナダキ鶴^{カヅ}を流布本に鴨と書けり

風早^{カザ}の三穂の浦廻^{マヅ}をこぐ舟のふな人動浪^{トヨム}たつらしも

風早之三穗乃浦廻乎榜舟之船人動浪立良下

卷三五三六頁にもカザハヤノ三穗ノ浦廻ノシラツツジとよめり。紀伊の地名なり
○卷十四に

かつしかのままのうら未をこぐふねのふなびと佐和久なみたつらしも
とあれば第四句の動はサワグとよむべきに似たれど動は集中に多くはトヨムと
よめる上に同一の歌の集中二箇處に出でたるは必しも語々相同じからざればこ
こはトヨムとよむべし(舊訓以下皆サワグとよめり)

わが舟は明且石の潮にこぎはてむおきへなさかりさよふけにけり

吾舟者明且石之潮爾榜泊牟奥方莫放狭夜深去來

明石の間の且の字元曆校本には無し。衍字と認むべし○潮は湖に作れる本あり。さ
てその湖の字は集中にミナトに當てたり。卷三(三八二頁に

わが船はひらの湖にこぎはてむおきへなさかりさよふけにけり

とあり。今の歌とただ地名の異なるのみ上にもキナノ湖ニフネハツルマデとあり。
さて潮の字を舊訓にハマとよめるも、宣長が浦の字の誤とせるも共に非なり。アカ

シノミナトニとよむべし。アカシノミナトは即播磨國風土記に見えたる林潮にて
いにしへの明石川の河口ならむ

(ちはやぶる)金のみ埼をすぎぬとも吾者わすれじしかのすめ神

千磐破金之三崎乎過鞆吾者不忘牡鹿之須賣神

鐘岬は筑前國宗像郡の地名なり。歌の趣によれば海路の難處と見ゆ。シカは同國糟
屋郡なる志賀なり。シカノスメ神は所謂志加海神社にて海上を守り給ふ神なり(記
傳卷六三五頁を参照すべし)○一首の意はタトヒ難處ハ過グトモ神ノ御恩ハ忘レジ
となり。いまだ鐘岬を過ぎぬ程の歌なり。もし過ぎての後の歌とせば第三句はスギ
ヌレドとあらざるべからず。さてかく云へるは畢竟志賀の神に海路の安全を祈る
心なり。古義に第四句の吾者をアヲバと改訓せるは歌の意を誤解せるなり

あまぎらひひかたふくらし(水ぐきの)崗のみなとに波たちわたる

天霧相日方吹羅之水莖之崗水門爾波立渡

アマギラヒは空の曇る事。ヒカタは袖中抄に異風なりといひ考に

土佐の俗、日中の南風を日方といふといへり
といひ古義に

今土左人は六月の頃日中に南風の吹を日方吹と云り
といへり○水グキノはヲカの枕辭なり(玉勝間卷一全集第四の六頁)○崗ノミナトは今の
筑前國遠賀郡なる遠賀川の河口に當るべし。但今は地形かはりて堪容大船といふ
べき湊はなしとぞ

大海の波はかしこし然れども神乎齊禮而ふなでせばいかに
大海之波者畏然有十方神乎齊禮而船出爲者如何

卷九に

わたつみのいづれの神乎齊祈者歟ゆくさも來さもふねのはやけむ
といふ歌あり。今の歌の齊禮は齊祈の誤にあらざるか。さて略解には共にイハフと
よみ(即こゝをカミヲイハヒテ、卷九なるをカミヲイハハバカとよみ)古義にはこゝ
をカミヲイハヒテとよみ、卷九なるをカミヲイノラバカとよめり。案ずるにこゝも
卷九も同訓たるべし。さてイハフとイノルといづれかなふといふに勸請スルと

いふにはあらで祈念スルといふ意とおぼゆればこゝはカミヲイノリテ、卷九なる
はカミヲイノラバカとよむべし。辭の例は卷六(一〇三三頁)に天地ノ神乎ゾイノル
カシコカレドモ、卷十三にアメツチノ神乎イノリテワゴフル君ニ必アハザラメ
ヤモ、同卷にアメツチノ神乎イノレドワレハモヒマス、卷二十にアメツチノカミ乎
伊乃里豆サツヤヌキツクシノシマヲサシテイクワレハなどあり○一首の意は古
義に『云々して船出したらば如何にあらむと楫取などに問かくるよしなり』といへ
る如し

をとめらがおる機の上を眞櫛用かかげたく島波間從所見
未通女等之織機上乎眞櫛用搔上拷島波間從所見

カカゲまでは序なり。即カカゲタクをタク島にいひかけたるなり。タクはカカゲと
同意なり(卷二一七頁參照)略解にタグルの約言と云へるは非なり○結句は舊訓にナ
ミマヨリ、ミユとよめるを古義にナミノマユミユに改めたり。上(一三〇三頁)にもア
マノトモシビ浪間從所見とあり○タク島は略解古義に出雲國島根郡多久なるべ
しといへれど出雲の多久は島にあらず。案ずるにこのタク島は肥前國平戸島の北

リとヨセとはいづれにても可なれどケルカはクルカとあるべきなり。家は來の誤ならむ

たか島の阿戸白波は動ども吾は家もふいほりかなしみ

竹島乃阿戸白波者動友吾家思五百入鉤染

卷九に

高島のあど河波は驟ども吾は家もふやどりかなしみ

とあり。略解に「白は河の草書より誤れる歟」といへり。第二句はアド川ノ波ハといへるなり。○第三句は舊訓にトヨメドモとよめるを略解古義にサワゲドモと改めたるは卷九によれるなれどヤドリとイホリと結句のかはれるを見れば第三句はた必しも同じきを要せず。集中に動は多くトヨムとよめればこゝもトヨメドモとよむべし。三四の間にソノ音ニモマギレズといふことを挿みて聞くべし。カナシミはカナシサニなり。○卷二(一八六頁)に

ささが葉はみやまもさやに亂どもわれは妹もふわか来ぬればとあると似たり

大海のいそもとゆすりたつ浪のよらむともへる濱のさやけく

大海之磯本由須理立波之將依念有濱之淨奚久

上一三〇九頁にも

大海のみなぞことよみたつ浪のよらむともへる磯のさやけさ

とあり。上三句は序なり。サヤケクはサヤケサとおなじくてサヤケクアル事ヨといふ意なり(卷六一〇九頁 参照)

(珠くしげ)みもろと山をゆきしかば面白くしていにしへおもほゆ

珠匣見諸戸山矣行之鹿齒面白四手古昔所念

ミモロト山は山城國宇治郡にあり。即三室戸山なり。○ユキシカバはユキシニといはむにひとし。卷三(三九〇頁)なる

焼津へにわがゆきしかば駿河なる阿倍の市路にあひし子らはも

卷八なる

かすみたつ野のへの方にゆきしかば鶯なきつ春になるらし

此外にも同例あり○イニシイニカシへオモホユは古義に「此山につきたる故事などあるを思ひてよめるならむ」といへり

(ぬばたまの)くろ髪山を朝こえて山下露にぬれにけるかも

黒玉之玄髪山乎朝越而山下露爾沾來鴨

代匠記に「玄髪山下野なり」といへるを略解古義に「こゝのついで東國にあらざるべし」といへり。備中國阿賀郡にも黒髪山あり。是にや

(足引の)山ゆきくらし宿からば妹たちまちて宿かさむかも

足引之山行暮宿借者妹立待而宿將借鴨

妹といへるは若く美しき女といふばかりの意なり。心にゑがきし空想をそのまゝにうたへるなり。略解に「此妹はくぐつなどいふ類昔も有しか」といへるは空想といふものを知らざる人の言なり

みわたせばちかき里廻ウラノマヅをたもとほり今ぞ吾來ウラガキ禮巾レヒレふりし野に

視渡者近里廻乎田本欲今衣吾來禮巾振之野爾

舊訓に禮を第四句につけて今ゾワガクレヒレフリシ野ニとよめるを略解に

吾コシとかクルとかなくては詞もつづかず。ヒレを巾一字のみ書る例もなし

といひて禮を領の誤として下へ附けて吾來をワガコシとよめり○一首の意は略解に

故郷へ歸るにみわたしは近けれど廻りこし故やうやく今ぞ別れし野まで來りしと也

といへり。古義の説も之に同じ。案ずるにヒレフリシは別離の時にはあらで即今の事ならむ。即旅より歸るとてまづ從者を走らせて家人に知らせしによりて妻は郊外の野まで立出でて領巾振り招くに早く其處へ行かむと思へど道の回りたれば心いられしつゝ、今適に其處に到り著きぬる趣なるべし○サトミは郭なり。古義にサトノアタリと譯せるは非なり。ヲはナルヲ、タモトホリはマハリテなり

をとめらがはなりの髪をゆふの山雲なたなびき家のあたりみむ

未通女等之放髪乎木綿山雲莫蒙家當將見

初二は序○ユフノ山は卷十に

思出る時はすべなみ豊國の木綿山雪のけぬべくおもほゆ
とあり。豊後國速見郡なる由布嶽の事なり

しかのあまの釣船之綱不△堪[△]ころにもひていでてきにけり

四可能白水郎乃釣船之綱不堪情念而出而來家里

舊訓に綱までを第二句としてツリブネノツナタヘズシテとよめるを略解^考には綱
を第三句に屬してツリスルフネノツナタヘズとよめり。古義には不堪の間に勝の
字を補ひてツリブネノツナタヘガテニとよみて上二句をタヘにかゝれる序とせ
り。しばらく古義に従ふべし。○さて同書に「此歌は相聞の歌なるを誤てこゝに載し
なるべし」といへり

しかのあまの鹽やく煙風をいたみたちはのぼらず山にたなびく
之加乃白水郎之燒塩煙風乎疾立者不上山爾輕引

右伴歌者古集中出

卷三(四四七頁)に

繩の浦にしほやくけぶりゆふさればゆきすぎかねて山にたなびく

といふ歌あり。○左註の古集は古歌集の誤かと代匠記にいへり

おほなむちすくな御神のつくらししいもせの山^{ヤマ}みらくしよしも

大穴道少御神作妹勢能山見吉

古義に第四句の山の下にハをよみそへたり。卷六(一一〇三頁)にナラノ明日香乎[△]
ラクシヨシモまた卷八にオトノミニキキシ吾妹乎[△]ラクシヨシモとあれば契沖
千蔭の如く山ヲとよむべし。○穴の下に六の字などを落したるか

吾^ワ妹子^{ミコ}みつつしぬばむおきつ藻の花さきたらば我^ワにつげこそ

吾^ワ妹子^{ミコ}見^ミ偲^ヒ奥^ウ藻^ソ花^ハ開^キ在^ニ我^ワ告^ツ與^ル

契沖、吾妹子にトをよみ添へたり。略解古義共に之に従へる中に千蔭は其花ヲダニ
妹ト思ヒテシノバムの意とし雅澄は妹ト共ニ見ツツ賞セムの意とせり。案ずるに
羈旅の歌なれば妹ト共ニ見ツツ賞セムの意とすべきにあらず。卷二十に
あしがらのやへ山こえていましなばたれをか君とみつつしぬばむ

考ニ與を乞、改
つて、例の草
あると乞、見誤
とあると見誤

といふ歌あり。此例によれば今は沖ッ藻ノ花ヲ妹ト見テ妹ヲシノバムといへるなり

君がためうきぬの池の菱探と我染袖ぬれにけるかも

君爲浮沾池菱探我染袖沾在哉

ウキヌノ池は八雲御抄に石見とあり。げに石見出雲に跨れる三瓶山に浮沼池といふがありて三瓶川の水源なり。○採を舊訓にトルとよめるを古義にツムに改めたり。いづれにてもあるべし。○第四句は舊訓にワガソメシソデとよめるを古義に袖を衣の誤としてアガシメゴロモとよめり。染メタル袖といふべく染メシ袖とはいふまじき處なればまづ雅澄の説に従ふべし。シメゴロモは古事記八千矛神の御歌にソメキガシルニシメゴロモヲ云々とあり。○卷十六に

豊國の企玖の池なる菱のうれを採とや妹が御袖ぬれけむ

といふ歌あり。○浮の下の沾は沼を誤れるなり

妹がため菅の實採にゆくわれを山路惑この日くらしつ

妹爲菅實採行吾山路惑此日暮

右四首柿本朝臣人麿之歌集出

採はトリともツミともよむべし(古義にもこれはトリとよめり)○第三句は舊訓にユクワレヲとよめるに従ひて行ク我ナルヲの意とすべし(古義に之を斥けてユキシアレとよめるは却りてわろし)○第四句は古義に従ひてヤマチニマドヒとよむべし(舊訓はヤマチマドヒテ)

問答

佐保河になくなるちどり何しかも川原をしぬびいや河のぼる

佐保河爾鳴成智鳥何師鴨川原乎思努比益河上

千鳥に問ひかけたるなり。シヌブは賞美する事。河ノボルは河ヲノボルを一語としていへるなり

人こそはおほにも言目わがここだしぬぶ川原をしめゆふなゆめ

人社者意保爾毛言目我幾許師奴布川原乎標結勿謹

右二首詠鳥

言目は念目の誤か。然らばモハメとよむべし。オホニオモフはナホザリニ思フなり。ココダは大ヘンニなり。川原ヲのヲはナルヲなり。シメユフは我物と領じて他を入れぬをいふ。○これは千鳥の答に擬せるなり。

ささなみのしが津のあまは吾なしにかづきはなせそ浪たたずとも
神樂浪之思我津乃白水郎者吾無二潛者莫爲浪雖不立

卷二三一三頁にササナミノシガツノ子ラガとあり。滋賀津は今の天津の北方に當れりといふ。タトヒ波立タズヨキ日和ナリトモ我見ル時ナラズバ水ニ潛リ入ルナといへるにて海人のかづきを見ておも白く思ふ餘にそを我物と領せむと思ふ心なり。今も幼兒にはしばしば見る心理状態なり。

大船に梶しも有奈牟君なしにかづきせめやも波たたずとも
大船爾梶之母有奈牟君無爾潛爲八方波雖不起

右二首詠白水郎

三註ともに舊訓の如くアラナムとよめり。さて略解には
今君がおはする時にかづきして見せ奉らむものを舟かちもがなといふ意也
といひ古義には

いかで大船に楫もがなあれかし。さらば沖中に出てよき貝玉をかづき出来て心
だらひにみせ奉らむものを大船に楫なければこそ云々
といへり。潛をして見するに大船の楫は入用ならず。又略解古義にいへる如くにて
は初二は贈歌と因縁なし。案ずるに有奈牟はアリナムとよむべく。さて大船ニ楫シ
モアリナムは海人の常に用ふる誓辭ならむ

臨時

月草にころもぞ染流君がため綵色衣すらむともひて
月草爾衣曾染流君之爲綵色衣將摺跡念而

臨時は今のヲリニフレテなり。○綵色衣は略解にマダラノコロモとよめり。下にマ
ダラノコロモ著ホシキカ島ノハリ原時ニアラネドモとあるを見ればマダラノ衣
はさまざまの色に染めたる衣にはあらで處々染めたる衣なり。○染流を略解古義

にソメルとよみて「我衣ゾ色ニソミタルとなり」といへるは非なり。染流はソムルとよむべく第二句の衣も亦人の衣にて君ガ爲ニ斑ニ衣ヲスラムト思ヒテ月草ニゾ衣ヲ染ムルといへるなり。スルもソムルも同事なり

〔春霞〕の上ゆただに道はあれど君にあはむとたもとほり來も

春霞井上從直爾道者雖有君爾將相登他回來毛

三註共に〔詔詞解卷六にも〕井上を地名としたるは非なり。キはキ中、田キなどのキにて俗にいふタンボなり。タンボヲ貫キテ行ケバ道ハ近ケレド君ニ逢ハム爲マハリ道ヲスルといへるなり

道のへの草深ゆりの花ゑみに咲之柄に妻といふべしや

道邊之草深由利乃花咲爾咲之柄二妻常可云也

初二は花エミニの序なり。草深ユリは雜草中にさける百合なり。略解にクサフケユリとよめるはわろし。○花エミは花の如くゑむをいふ。略解に「花のさくを人の笑ふになぞらへてハナエミといへり」といへるは本末顛倒せり。○第四句は略解古義共にエマシシカラニとよめれどエミシガカラニとよむべし〔卷四五頁〕天皇思酒人女

王御製歌なる咲之柄爾はいづれにてもあるべし。○一首の意は我ヲ見テ打エミキトイフノミニテ我ニ心ヲ許シツト認ムベケムヤといへるなり

默然あらじとことのがさにいふことを聞知れらくは少可者有來

默然不有跡事之名種爾云言乎聞知良久波少可者有來

默然はナホとよむべし。モダアラジトは黙ツテ居ルマイト思ウテとなり。○コトノナグサは俗にいふ世辭なり〔七四七頁參照〕古義に「事のなぐさめにと云意なり」といへるは從はれず。○キキシレラクハは先方ガ言ノナグサト聞知リタル事ハとなり。○結句は古義に「或人の考に苛曾有來の誤にてカラクゾアリケルなるべし」といへるに從ふべし。苛を小可の二字に、曾を者に誤れるなり。卷十一にも類似の誤あり。カラクはツラクなり

佐伯山うの花以之かなしきが手をし取りてば花はちるとも

佐伯山于花以之哀我子駕取而者花散靱

佐伯山は八雲抄に攝津とせり。略解には

伯は附の字の草より誤りてサツキ山ならんか。サツキ山は地名に非ずといへり。げに佐附山の誤字にてただ五月の山といふことならむ。○カナシキガはカハユキ女ノとなり。下に

廣瀬川袖つくばかり淺きをや心ふかめてわがおもへらむ

とある淺キヲヤも心淺キ人ヲヤといへるにて今と相似たり。○手ヲトルは女を扶くるなり。テバはタラバなり。花ハチルトモの下にヨシといふ辭を加へて聞くべし。○以之は舊訓にモタシとよめるを略解古義にモチシに改めたり。案ずるに手ヲシ取リテバ花ハチルトモといへるを見れば卯花は作者の持てるにて相手の女の持てるにあらず。さればモチシとよみてカナシキ(女)に續くべからず。之は且の誤字にてそのモチテは持ナガラ^{トキナラズ}の意ならむ。○子は手の誤とすべし。

不時^{トキナラズ}まだらのころもきほしき^キか衣服^{キヌ}はり原時にあらねども

不時班衣服欲香衣服針原時二不有鞆

初句は舊訓の如くトキナラヌとよむべし。結句と呼應せるなり。略解古義にトキジクニとよみ古義に「トキナラズとよみてもよし」といへるは従はれず。もしトキジク

とよまむとならばトキジクノとよむべし。○キホシは著マホシなり。下にも

つるばみのきぬきる人は事なしといひし時よりきほしくおもほゆ

又卷十四にキミガミケシシアヤニ伎保思モとあり。○第四句は元曆校本に島針原とあり。類聚古集にはただ針原とありてシマノハリハラと點せり。衣服針原とあるは誤なるべし。袖中抄に此歌を引けるにも島ノ針原とあり。島は大和國高市郡の地名なり。卷二(二三八頁)にタチバナノ島ノ宮とあるも、下に橋ノ島とあるも同處なり。推古天皇紀に

大臣(○蘇我馬子)、家於飛鳥河之傍、乃庭中開小池、仍興小島於池中、故時人曰

島大臣

とあり。島といふ名はこれより起れるなり。大名を橋といへるは其地に橋樹多かりしによれるなり。○ハリ原は萩原なり。○一首の意はマダ萩ノ花ノサク頃ナラネド萩ノ花モテ摺リタル衣ガ著タシとなり。○班は斑の誤なり。

山守の里へかよひし山道ぞしげくなりける忘れけらしも

山守之里邊通山道曾茂成來忘來下

第三句は山道ノ草木ヅ結句は我ヲ忘レケラシモにて山守は男をたとへたるなりと略解古義にいへり。余の案は次の歌の下に云はむ

(あしひきの)山つばきさく八岑こえ鹿まつ君がいひづまかも

足病之山海石榴開八岑越鹿待君之伊波比孀可聞

ヤツヲはあまたの岡なり。イハヒヅマは大切にする妻なり。いにしへは猪をも鹿をも共にシシといひき。○宣長はシシマツまでを序として「狩人の鹿をうかがひねらひて待如くに大切にするいはひ妻といふ意也」といへれど決して序歌の體にあらず。もし宣長の説の如くならばシシマツ如クイハフ妻カモなどあらざるべからず。案ずるに君ガイハヒヅマカモとあるを見れば夫の作にもあらず妻の作にもあらず。で第三者の作なり。よりに更に思ふに前の歌と此歌とは二首相聯れる歌にて山中に住みし男の里に住みし女に通ひけむ故事を聞きてよめるにて山道ニ草木ノ茂レルヲ見レバカノ里へ通來シ山守ハ女ヲ忘レテ通來ズヤナリシといひ後の歌はソノ女ハ八丘コエツツ鹿ヲ伺ヒ待チシ人ノ大切ニセシ妻ニコソといへるなり。人といふべきを君といへるは卷三(五一八頁)にも例あり

あかときと夜鳥なけどこの山上のこぬれの於はいまだしづけし
曉跡夜鳥雖鳴此山上之木末之於者未靜之

夜明のさまにていとめでたし。山上は舊訓にヲカとあり。幽齋本にはミネとよめりといふ。契沖千蔭はミネとよめるに従ひ雅澄はヲカとよめるに従へり。文字によればミネとよまむ方穩なり。但いづれにしても高山の趣にあらず。代匠記及古義に遊仙窟の可憎病鵲夜半驚人の文を引けるは用なし。夜半のさまにあらねばなり

西の市にただ獨いでて眼不並買師絹の商自許里鴨

西市爾但獨出而眼不並買師絹之商自許里鴨

奈良の都には東の市西の市とてありしなり。東市は卷三(四一〇頁)に見えたり。○眼不並は舊訓にメナラバズとよめり。語例は古今集戀五に

花がたみめならぶ人のあまたあれば忘れぬらむ數ならぬ身は

とあり。略解に「古今集に花ガタミメナラブ人といへるうらうへにて見くらぶるものなき也」といへるは非なり。メナラバズは自動詞なれば見クラブルモノノナキ

とは譯すべからず。さる意とせむには古義の如くメナラバズとよまざるべからず。否メはミエの約なれば(キエを約してケといひハへを約して綜といひ蹴を約してケといひ似を約してニといふが如し)メナラブ(ミエナラブ)とはいふべくメナラブル(ミエナラブル)とはいふべからず。案ずるにメナラブは顔を並ぶる事なり。さればメナラバズは人と伴ハズといふ事なり。もし之を見くらぶるもの、無き事とせば第二句のタダヒトリイデテといふ事は徒となるべし。○買師は從來カヘリシとよめれどカヒテシとよむべし。○商自許里は從來アキジコリとよめり。さて略解に「シコルはシミコルにて物に執する意なるべし」といひ古義に「商のしそこなひを云なるべし」といひ稿本片廂卷九に「商人の醜賣なりといへる也。俗に云買かぶりにて賣人のおしかぶせと云たぐひ也」といへり。いづれもげにとおぼえず。商自許里鴨は商耳許里鶴の誤にてアキニコリツルとよむべきにあらざるか。アキは賣買なり。卷十六なる商變領爲跡之御法アラバコソの商におなじ。コリツルは懲リツルなり。鶴を鴨と誤れる例は上一三二九頁にも見えたり

ことしゆく新島守が麻ごろも肩のまよひは許誰取見

今年去新島守之麻衣肩乃間亂者許誰取見

新島守を舊訓にニヒサキモリとよみ三註共に之に従へり。案ずるに防人は島のみを守るものにあらねば島守とは書くべからず。其上卷四七〇四頁に島守と書きてシマモリとよめる例あり。されば今もニヒシマモリとよむべし。但島守は防人のうちとおぼゆ。○マヨヒは布帛のいためるをいふ。トリミルは世話する事にてこゝにては繕ふ事なり。許は衍字なり。前の歌なる商自許里鴨の許のうつり入れるならむ大舟を荒海にこぎいで八船多氣△わが見し子らがまみはしるしも

大舟乎荒海爾擲出八船多氣吾見之兒等之目見者知之母

卷十五に大船ヲ安流美ニイダシとあれば荒海はアルミとよむべし。○八船タケは土左日記(二月五日の條)に

ゆくりなく風ふきてたけどもたけどもしりへしぞきにしぞきてほとほとしく
うちはめつべし

とあるタケドモと同語なり。さて宣長は

ヤフネタケは危き所にていろいろとはたらきて舟をこぐをいひて色々と心を

つくして女を逢見たるをたとへたるなり

といへれどげにはおぼえず○マミは俗にいふ目モトなり○案ずるに第三句に云々スレドといふ事あらでは四五と打合はず。されば八船タケの下に杼の字などのおちたるなるべし。さてヤは船にかゝれるにはあらでフネタクといふ辭にかゝれるなり(かのヤクモタツのヤも雲タツにかゝり、卷十一なるヤウラザシのヤもウラザシにかゝれるにて今と同例なり)。さればヤフネタクはコギスサムといふばかりの意なり○此歌は前の歌と共に防人を詠せるにて否此歌は防人に代りて懷を述べたるにて大船ヲ荒海ニ漕出デテ漕ギスサメド、ナホ女ノ顔ガ面影ニ立チテイチジルク見ユといへるなり

就所發思 旋頭歌

(もしきの)大宮人のふみし跡所、おきつ浪來よらざりせばうせざらましを

百師木乃大宮人之蹈跡所奥浪來不依有勢婆不失有麻思乎

右十七△古歌集出

代匠記に「十七首なるべきを首の字脱たり」といへり○略解に「近江の宮をうつされし後志賀、辛崎などのさまをよめるなるべし」といへる如し。卷一なるササナミノシガノ辛崎サキクアレド、ササナミノシガノ大ワダヨドムトモなどと同趣の歌なり。然も彼歌どもにもまさりてめでたし

(兒らが手を)まきむく山は常なれどすぎにし人に往卷目やも

兒等手乎卷向山者常在常過往人爾往卷目八方

ツネナレドは始終變ラザレドとなり。人は妻をさせり。結句を從來ユキマカメヤモとよみてそのマクを略解には求の意とし古義には交の意としたれど求にても交にても人ヲといふべく人ニとはいふべからず。されば卷は相などの誤にてユキアハメヤモなるを卷向山の卷の字のうつりてこゝに入れるならむ

卷向の山邊とよみてゆく水のみなわのごとし世の人われは

卷向之山邊響而往水之三名沫如世人吾等者

右二首柿本朝臣人麿歌集出

略解に『本(○)上三句は序也』といへれど序にはあらず

寄物發思

(こもりくの)泊瀬の山にてる月者みちかけ爲鳥人の常なき

隱口乃泊瀬之山丹照月者盈與爲鳥人之常無

右一首古歌集出

鳥は焉の俗體なり。さて爲鳥を舊訓にシテ、略解にシテ、古義にシケリ、訓義辨證(下卷八一頁)にスルモとよめり。鳥はげに集中にゾとよむべきも(ソノ山ノ水ノタギチ鳥など)ヲとよむべきも(秋風サムクフキナム鳥など)モとよむべきも(七日ノヨヒハワレモカナシ鳥など)あれどこゝは舊訓の如くシテゾとよむべく第三句の者は誤字にてテル月ノならむ。上三句は序なり。即テル月ノ如ク盈缺シテといへるなり。○異は映の誤か

行路

遠くありて雲居にみゆる妹が家にはやく至らむ歩め黒駒
遠有而雲居爾所見妹家爾早將至歩黒駒

右一首柿本朝臣人麿之歌集出

卷十四に重出せるに伊毛我敝爾とあれば家はエの如くよむべし

旋頭歌

(たちのしりさやに)いり野に葛引吾妹、眞袖以きせてむとかも夏草菊母
釵後鞞納野邇葛引吾妹眞袖以著點等鴨夏草菊母

タチノシリサヤニは二句に跨れる枕辭なり。○イリ野は冠辭考に

山城國乙訓郡入野神社と有に同じ所にてかの入野ノスキとよめるもこゝ成
べし。代正記、和名ニ丹後竹野郡、納野アリ、彼夏草、田舎ノ

といへり。上一二九六頁に妹ガ門出入乃河ノ瀬ヲハヤミとある入乃河も同處なる
べし。○略解に

草は葛の字の誤也。古訓クスとせり。宣長云。刈は引の誤也

といへり○眞袖以キセテムトカモを略解に

我に織て著せんとてか眞手もて夏葛引といふ也。左右の手を眞手といひ眞手を眞袖といへり

といひ古義には己ガ夫ニ令著テムトテカ兩袖モテ引ラムと譯せり。卷九に

小垣内の麻を引干し、妹なねがつくりきせけむ、白たへの紐の緒とかず云々

とあると合せて思ふに眞袖以は衣ニ縫ヒなどいふ意ならざるべからず。以は作などの誤にてマソ、デヌヒとよむにあらざるか

すみのえの波豆麻君之馬乘衣、雜豆臘漢女を座てぬへる衣ぞ

住吉波豆麻君之馬乘衣、雜豆臘漢女乎座而縫衣叙

宣長は二三句の波豆麻君之を波里摩著之の誤、乘を垂の誤としてハリスリツケシマダラノコロモとよめり。上(一三四五頁及一三四八頁)にも

月草にころもぞそむる君がためまだらのころもすらむともひて
時ならぬまだらのころもきほしきか鳥のはり原時にあらねども

とあり○雜豆臘は舊訓三註共にサニヅラフとよめれど關政方の備字例(十七丁)に

雜は音サフなればサハサヒ○伊雜雜賀など轉用したる例あれどサニとは轉用すべからず。さればこゝはサニヅラフとはよまでサヒヅラフとよむべし。ラフはルの延言なればサヒヅルヤ辛確ニツキなどの同例なり○採要

といへるに従ひてサヒヅラフとよむべし○第五句は舊訓にヲトメヲスエテとよめり。契沖は之に従ひて

毛詩にも漢之有女と云ひて美女ある處なれば彼處に准じて書なり

といひ宣長(記傳卷二十七一六〇五頁)はアヤメヲマセテとよみて

此をヲトメヲスエテと訓るは誤なり。漢女は漢國の女を云

といひ又(記傳卷三十三二〇一二頁)に

漢を阿夜と云こといかなる由にか詳ならず。漢織を書紀に穴織ともあるを以て思へば阿那と云となく此も阿夜と歎く聲より出たるか

といひ又(略解)

マセテは俗言に招待シテといふ意也。此訓、紀に例多し

といへり。漢をアヤといふは漢人が綾を織るに巧なりしより云ふならむ○一首の

意は宣長の説に

此歌は摺衣を人に贈るとして戯てよみやれるにて彼紀に見えたる漢國の衣縫女を呼て縫はせたる衣ぞといひやる也

といへり

すみのえの出見の濱の柴莫苺曾尼をとめ等赤裳下閨將往見

住吉出見濱柴莫苺曾尼未通女等赤裳下閨將往見

出見濱は舊訓にイデミノハマとよめり略解に

イヅミノハマ歟又イデミルハマノ歟考べし

といひ古義に

地名なるべしイデミノハマカイヅミノハマかなほ尋ぬべし

といへり無論地名なり地名辭書に

イデミノハマ 住吉森の西に松林あり細江淺澤の水林際を過ぎ海に入る此邊

を出見濱と呼ぶ住吉の獻火高燈籠あり

といへり田子ノ浦ユウチイデテ見レバといへる如く打出でて見る意にてイデミ

ノ濱とは名づけしにこそ○第三句について略解に

濱に柴刈こといかガ尼をネの假字に用たる例なし是は字のいたく誤れるなるべし試にいはいは三の句莫乘曾苺尼とや有けんナノリソカリニと訓べし

といひ古義には濱柴苺者尼の誤とし又集中に尼をネの假字に用ひたる例を挙げたり字音辨證(上卷十八頁)にも尼をネの假字に用ひたる例を挙げて

尼はネの假字にてネは吳轉音なり

といへり案ずるに舊訓のまゝにシバナカリソネとよむべく次の句との間にソノ柴ニタチカクレテといふことを補ひてきくべし○第四句以下を契沖はヲトメラガアカモノスソノヌレテユカムミムとよめり干蔭は將往見は往將見の誤にてユクミムなるべしといひ雅澄はヲトメドモアカモスソヒヂユカマクモミムとよめり契沖の訓に従ふべし

すみのえの小田を苺らす子やつこかもなき奴あれど妹が御爲に私田

住吉小田苺爲子賤鴨無奴雖在妹御爲私田苺

カルをカラスといふは多少の敬意を帯びたり。されば此格は自には云はず高貴なる御方は別なり。たとへば古事記なる八千矛神の御歌○ヤツコは下男なり○私田は略解に

或説に私は秋の誤ならんといへり。さもあるべし

といへり。さて略解にはアキノタカラスとよみ古義にはアキノタカルモとよめり。上三句は問、下三句は答なれば下の苺はカラスとはよむべからず。小田ヲカラス子にむかへて秋ノ田ヲカルとよむべし○御爲ニといへるについて三註に説なきは怪しむべし。案ずるに問者は女にて答に妹ガ御爲ニといへるは君ノ御爲ニといふ意なり。畢竟アナタニ差上ゲヨウト思ウテ自身デ稻ヲ刈リマスといへるにて戀情を含める戲言なり

池の邊の小槻がもとの細竹△苺嫌、それをだに君が形見にみつっしぬばむ

池邊小槻下細竹苺嫌其谷君形見爾監乍將偲

契沖のいへる如く細竹の下に莫の字のおちたるなり。略解に

池ノヘノヲ槻は地名にあらず。ただ槻ノ木ノモトといふ也。君は男をさす。其槻の木のもとにて相見し事などの有しならん

といへり○カタミニのニは後世のトなり

も (天在)ひめ菅原の草なかりそね(みな)のわたかぐろき髪にあくたしつく

天在日賣菅原草莫苺嫌彌那綿香烏髮飽田志付勿

契沖はアメナルをアメナル日とづづける枕辭としヒメ菅原を地名とせり。宣長はアメナルを枕辭とせずして

天上にあるひめすが原なり。然らざれば髪に芥のつくといふ事なし。是は天ナルササラノ小野のたぐひにてただ設けていふのみ也

といへり。即宣長は天上の菅原にて草を刈るによりて芥の落來て此土の人の髪につく趣に見たるなり。雅澄は契沖の説を是認して

在は傳の誤にてもあらむ。天傳日笠浦などもよめればなり

といへり。契沖の説に従ふべし○雅澄は又「草は菅の草書を誤れるなるべし」といり。

げに然るべし○ヒメスガ原はいづくにか知られず。上代より名高き美濃國可兒郡
久々利の近傍に姫といふ處あり。是か○此歌は若き男の菅を刈るを見て女のよめ
るなり

夏影房之下庭きぬたつわぎも裏儲わがためたたば差大裁

夏影房之下庭衣裁吾妹裏儲吾爲裁者差大裁

一二の句を舊訓にナツカゲノネヤノシタニテとよめり。庭は元曆校本によれば邇
の誤なり。契沖は一二の句を釋して

夏は木にもあれ何にもあれ陰の涼しき處にふすを女は北の方に深く住ものな
ればナツカゲノネヤと云なるべし

といへり。房は窓の誤字にて房之下はマドノモトとよむべきにあらざるか○第四
句は契沖の説に「衣の裏を儲置てと云へるか」といへり。裏儲は金儲の誤にてアキマ
ケテなるべし。集中に秋儲而春儲而春設而などあり。マケテはカタマケテと同意に
て秋マケテは秋近ヅキテといふこと、おもはる○結句を契沖は「ヤヤオホニタテ
とよみてヤヤオホキニと意得べし」といひ雅澄は「こゝは義を得てイヤヒロニタテ

とよまむか」といへり。字のまゝにオホとよみて可なり

(梓弓)引津の邊なるなのりその花及採あはざらめやものりその花

梓弓引津邊在莫謂花及採不相有目八方勿謂花

引津は今の筑前國絲島郡の地名なり。及採は舊訓にツムマデハとよみ略解古義に
ツムマデニとよめり。採は咲の誤字にあらざるか。さらばサクマデニとよむべし○
アハザラメヤモは逢ハザラムヤ否逢フ折アルベシとなり。古義にアハズテアラム
ヤハアハズニハ得アラジト思フヲと譯せるは非なり○第六句は古義に

其間よくしのびてわが名を勿謂そ、人に知られてはあふことかたからむぞと云
意を勿謂花にいひかけたるなるべし

といへる如し

(うちひさす)宮路をゆくに吾裳はやれぬ、(玉の緒の)念委家にあらしを

擊日刺宮路行丹吾裳破玉緒念委家在矣

元曆校本にも念委とありて訓はオモヒミダレテとあり。略解に「元曆本にミダレテ
と有からはもと念亂と有しを草書より誤れる成べし」といへり○一首の意は略解

念委 旧オモヒミダレテ
契沖 オモヒミダレテ、モト
ミツケテイト立得
カクシ今押 オモヒミ
テモト讀ハシ、香
ノ字ハ揚雄、甘泉賦云
考 オモヒミダレテ

瑞穂々々 香如山 何晏景福面也云叢集委積

に

家に在てわびてのみあらんを戀ふる人に逢やと宮仕にことよせて宮路通ふ程に裳も破れぬるよと也

といへり。案ずるに此歌は卷十一なる

うちひさす宮道にあひし人妻ゆゑに玉の緒の念亂れてぬる夜しぞおほき

といふ歌とも二首一聯の歌にてウチヒサス宮デニアヒシウチヒサス宮路ヲユ

クニとつづきたりしに相離れて一は人麿歌集中に入り一は古歌集中に傳はりて

本集にも卷を異にして収められたるにあらざるか

君がため手ぢからつかれ織オリタル在衣服キヌ斜シラ春ハルさらば何イカナル何ハナニすりてばよけむ

君爲手力勞織在衣服斜春去何何摺者吉

スリテバヨケムは摺リタラバヨカラムなり○宜長いへらく

斜は料の誤何何は何色の誤也織たる絹は衣服の料なればかく書てキヌとよま

せたり何色を何何と誤れるは何色と書るを何々と見たる也

といへり。案ずるに何何は何花の誤にてイカナル花ニならむイカナル色ニにては

春サラバといへる詮なし斜は叫の誤か此二十三首の旋頭歌にはニヲなどのテニ

ヲハは多くは略したれど又サヤニイリヌ邇アヤメ乎マセテキミガカタミ爾ミヤ

ヂヲユク丹なども書けり

(はしだての)くらはし山タツヤに立白雲タツヤみまくほりわがするなべタツヤに立白雲

橋立倉椅山立白雲見欲我爲苗立白雲

倉椅山は大和國にありて今磯城郡に屬せり多武峰の音羽山の事なり○契沖は

立白雲とはうるはしき物から目にのみ見て手にも取られぬを女のさすがに目

には見えて逢べくもなきによそへたるにや

といひ雅澄も此説に従へり。案ずるにミマクホリワガスルは白雲を見むと欲する

にあらず倉椅山を見むと欲するなり一首の意は倉はし山を見むと思ふに生憎に

白雲の立ちて眺望を妨ぐるを嘆せるなり○立白雲は舊訓三註共にタテルシラク

モとよみたれどタテルにてはワガスルナベニと動靜相かなはず改めてタツヤシ

ラクモとよむべし

(はしだての)くらはし川の石イハのはしはも壯子ツカ時トキ我度ワタクリ爲ニいはのはしはも

橋立倉椅川石走者裳壯子時我度爲石走者裳

イハノハシは上二五八頁に瀬々ユワタリシイハバシモナシとあるイハバシに
おなじ〇ハモはいづらと尋ぬる辭なる事前人のいへる如し〇壯子時は略解にヲ
ザカリニとよめるに従ふべし。男盛ニなり〇度爲は前註にワタリテシ又ワタリシ
又ワタセリシとよめり。ワタリセシとよむべし。意はワタリシといはむに齊し〇倉
椅川は音羽山より出で西北に流れ櫻井にて忍坂川と合ふ川なり

(はしだての倉椅川の河の靜菅わが苅りて笠にも編まず川の靜菅

橋立倉椅川河靜菅余苅笠裳不編川靜菅

シツスゲは略解に

下菅の意にて菅の小さきをいふか。又は一種の菅の名か

といひ古義に

靜は借字にて石著菅なり

といへり。案ずるにシツスゲは編ある菅ならむ。いにしへ編布を倭文といひしを思

ふべし(卷三 六五二参照)

春日すら田にたちつかるきみはかなしも(若草の)つまなききみが田に
たちつかる

春日尙田立羸公哀若草嬬無公田立羸

ハル日スラは代匠記に「春の日の心のどかなるべき時さへなり」といひ略解古義に
「長き春の日すら」と譯せり。契沖の説に従ふべし。〇第二句は今の格ならば田ニタチ
ツカルルといふべし。こゝに田ニタチツカル君とつづけたるは連體格の代に終止
格をつかへるなり(此卷附録参照)

やましろのくせの社の草なたをりそ、已時とたちさかゆとも草なたを
りそ

開木代來背社草勿手折已時立雖榮草勿手折

已時は眞淵宣長(記傳卷三十六 五二一五)の説に従ひてワガとよむべし。オノガといふ
べきをワガといへる例少からず。草ガオノガ時ト立榮ユトモといへるなり。〇一首

の意は略解に

社をもていふを思へば主有女に係想するともあながちなる業なせそといふなるべし。己時立榮トモとは其女のみさかりなるを草の時を得て榮るにたとへたるか

といへる如くなるべし

あをみづらよさみの原に人相鴨ヒトモアハカモいはばしのあふみあがたの物語せむ
青角髪依網原人相鴨石走淡海縣物語爲

アヲミヅラは略解に枕辭とし、古義に

依網ヨサミは碧海郡なれば碧海面依網といへるなるべしと門人南部嚴男いへり。さもあるべし

といへり○相鴨は略解に

宣長云。アハヌカモと訓べし。アヘカシの意也。相の上不の字なきにアハヌとよむ事はいかかと誰も思ふ事なれど集中に例多し

といへり。セヨカシの意なるヌカモに不の字を書けるは集中に一首もある事なし

(卷四七六二参照)○アガタは任國なり。古義にこの淡海ウチノを遠江の事として

歌の意は京へ上ル道中ノ參河國依網原ニイカデ思フ人モガナアヘカシ、サラバワガ任ヲラレテアリシ遠江國ノアリシヤウヲ物語シテキカセムヲとなるべし。此

歌は遠江國の司任はて、上る道參河のよさみの原にてよめるにて實は思ふ人に逢まほしきをさといはでただおほよそにいへるなり

といへり。案するにこは近江國司なりし人の東國に轉任せられしが三河の依網原にてよみしにて近江はなほ今の近江なり。ヒトモはシル人モなり。今行かむとする國のおぼつかなきにつけて今まで在りし近江のなつかしければもし知る人に逢はば近江の物語して自慰めむと思へるなり○略解に

人モは人ニモといふべきをかくいへり。後に花見テ歸ル人モアハナンとよめるも同じ

といへるは非なり。いにしへ他を主としては人ノアフといひ自を主としては人ニアフといひしなり。たとへば古今集春下の詞書に

志賀の山ごえに女の多くあへりけるによみて遣しける

とあり。今も他を主として人モといへるなり。人ニモを略せるにあらず
みなとの葦のうら葉をたれかたをりし、吾背子が振△手見むと我ぞた
をりし

水門葦末葉誰手折吾背子振手見我手折

ウラバは先端の葉なり。略解に

按に振の下衣の字を脱せしか。ソデフル、ミントと有べし

といへり。フルソデ、ミムトとよむべし。上三句は問、下三句は答なり

(垣こゆる)犬よび越とがりするきみ、青山の葉しげき山邊馬やすめきみ

垣越犬召越鳥獵爲公青山葉茂山邊馬安君

第二句は舊訓にイヌヨビコシテとよめり。略解に

宣長云。垣コユルはただ犬といはん枕詞也。ヨビコシテは呼令來テ也。といへり

といひ古義には越をコセテとよめり。案ずるに越は垣越の越の字のうつれるにて
もとはヨビタテテとありしならむ。ヨビタテテは喚び催シテといふ事にて上(一)二

七八頁)にも妻ヨビタテテ邊ニチカヅクモとあり○山邊の下にニの辭なくてはか
なはず。即略解古義の如くハシゲキヤマベとよみてはあるべからず。舊訓にはハシ
ゲキヤマベニと八言によみたれどさては調よろしからず。又アヲ山ノ葉シゲキ山
邊と山の字のかさなれるも心よからず。思ふに邊は邇の誤なるべし。邊を邇の誤と
すれば山の字のかさなれるも難とならず○ヤスメはヤスメヨなり。いにしへは二
段活の命令格にもヨを添へざる事ありしなり

(わたの底)おきつ玉藻のなのりその花、妹と吾此何ありとなのりその花
海底奥玉藻之名乗曾花妹與吾此何有跡莫語之花

二三は沖ツ玉藻ノ中ノナノリソといふ意なるべし○妹與吾を舊訓にイモトワレ
トとよめれど下のトを略してイモトワレといへるにてもあるべし○此何の何は
荷の誤なるべしと契沖のいへるに木村博士(訓義辨證上卷四八頁)は
何荷はいにしへ通用の文字なり、、されば何字此まゝにてニの假字とすべ
し

といへり。卷二(二五九頁)なるワガオホキミノ、カタミ何ココヲの何と共になほ荷の

誤とすべくや。さて略解にシをよみ添へてココニシアリトとよめれどシをよみそへむは無理なり。なほ六言によむべし。○結句はアリトナノリソをナノリソノ花にいひかけたるなり

此崗に草かる小子コラハしかなかりそねありつつも君が來まさむ御馬草ウマクサにせむ

此崗草刈小子然刈有乍君來座御馬草爲

小子を舊訓にワラハとよめるを古義にコドモに改めたり。いづれにてもあるべし

○卷四にも

佐保河のきしのつかさのしばなかりそねありつつも春しきたらばたちかくるがね

とあり。アリツツモはソノママニテといふ意とおぼゆ。○然刈の間に莫をおとせるならむ

江林ヤドレに次タビししやも求吉モトムルニヨキしろたへのそでまきあげてししまつわがせ

江林次完也物求吉白栲袖纏上完待我背

江林を契沖干蔭は地名とし雅澄は奥深からぬ林の義なるべしといへり。共に従ひがたし。おそらくは江は誤字なるべし。○次は舊訓にヤドルとよみ求吉は契沖モトムルニヨキとよめり。宣長は次を伏の誤求吉を來告の誤としてフセルシヤモキヌトツゲケムとよめり。語格上フセルといひてキヌとはいふべからず。但次は伏の誤にてもあるべし。求吉はなほ字のままにモトムルニヨキとよむべし。○袖マキアダテはまくり手して待つ意なりと契沖いへり。○完は突の俗體、突は肉の古字、肉は猪鹿の借字なり

(丸雪アラレふり)遠江トホのあど川やなぎカワツレド雖カワツレド刈カまたもおふちふあど川やなぎ

丸雪降遠江吾跡川楊雖刈亦生云余跡川楊

初二を略解にアラレフリトホツアファミノとよめり。アラレフリは枕辭なり。略解にあど川は近江高島郡也。遠江にも同じ地名有か土人に問べしといひ久老の信濃漫錄(二二丁)に

遠江にあど河をよみ合せたるいかにぞやおぼゆるに門人御園常言がいはいく日

本靈異記に近江國坂田郡遠江の里とあるを見れば坂田郡と高島郡とはもと隣れる郡にてあど川は兩郡に跨る川にてやありけむ。故にトホツアフミノアド川ともタカ島ノアド川ともよめるなるべし
といひ古義に

遠江は中山嚴水が近江國にも遠江といふ地あり。そこなりと云るが如し。靈異記下卷に近江國坂田郡遠江里有一富人姓名未詳也と見えたり云々
といへり。案ずるにアド川は上にもタカ島ノアド川波ハサワゲドモなどありて琵琶湖の西方なる高島郡を貫きて湖水に注げり。靈異記下卷第八に坂田郡遠江里とある坂田郡は湖水の東方にありて高島郡とは湖水を隔てたれば果して遠江といふ里ありとも吾跡川とは風馬牛なり。雅澄の萬葉名所考アドの條に

近江國高島郡遠江といふ里にある地なり

と斷定して云へるは人まどはしなり(地名辭書にも右の文をそのままに載せたり。

近江國のうち奈良より遠き地方をそのかみトホツアフミといひならひしならむ

○雖尙は略解古義にカレドモとよみたれどカレド又はカレドモといふべくカ

レドモとはいふまじき處なり。ヲリツレバタブサニケガルなどの例によりてカリツレドとよむべきか○卷十四にヤナギコソキレバハエスレ云々とあり

(朝づく日)むかひの山に月立みゆ、遠妻を^{モテ}持在^{クル}人し看つつしぬばむ

朝月日向山月立所見遠妻持在^{モテ}人看^{クル}乍偲

右二十三首柿本朝臣人麿之歌集出

月立の立は古義に従ひてタテリとよむべし。契沖の「立とは出るなり」といひ雅澄の「いにしへ月の出るをタツといへり」といへるはいかか。ただ山上に月の見えたるを月タテリといへるならむ○持在を略解にモチタルとよみ古義には舊訓に従ひてモタラムとよめり。略解に従ふべし○トホツアマ云々の意は遠き處に妻をおきたる人は此月を見てその妻を偲びなむとなり。卷十一に
遠づまのふりさけ見つつしぬぶらむこの月の面に雲なたなびき
とあると主客はたがへど意は一なり

かすがなる三笠の山に月の船いづみやびをののむさかづきにかげに

みえつつ

春日在三笠乃山二月船出遊士之飲酒杯爾陰爾所見管

古義に「歌の意、表はきこえたるまゝにて裏はうつくしき女の顔の云々」といへるは非なり。裏の意などある事なし

譬喩歌

寄衣

今造^{イマツクル}まだらのころも面就^{オモヅキテ}吾爾^{ウニ}おもほゆいまだきねども

今造^{イマツクル}班衣服面就^{オモヅキテ}吾爾^{ウニ}所念未服友

今造は契沖のいへる如く字のまゝにイマツクルとよむべし(略解にはアタラシキとよめり)○面就を契沖はメニツキテとよみ宜長はオモヅキテとよみて

オモヅキテ云々はワレニヨク似アヒタル衣ト思ハルといふ意なり

といひ雅澄はメニツキテをよしとせり○吾爾を雅澄は吾者の誤としてアレハと

よめり。又雅澄は

歌意はイマダ逢見ザレドモ女ノウルハシサニ目ニツキテ我ハ常ニコヒシク思

ハルルといふことを衣に譬ていへるなり

といへり。案ずるに面就と吾爾とをおきかへ面就を似合ふ意とすればよく聞ゆ。但面就はオモヅキテならでなほよみやうあるべし。再案ずるに似就の誤としてニツカヒテとよむべきか

紅にころも染めまくほしけども著てにほはばや人の知るべき

紅衣染雖欲著丹穗哉人可知

キテニホハバは其衣ヲ著テカガヤキテ見エバとなり。ヤは疑のヤなり。バヤとつづけるにあらす○一首の意は古義に

うるはしき女を戀しくは思へどもそれに逢見ば早くあらはれむかと云をたとへたるなり

といへり。案ずるにクレナキニ衣シメマクホシケドモは妹ニ逢ハマホシケレドといふことの譬、キテニホハバは逢ヒテウレシサノ色ニ顯ハレナバといふことの譬

にて結句は戀の方に附きたる辭なり。又シメマクはこゝにては染メテ著マクの意なるを著は下に譲れるなり。○丹穗の下に脱字あるべし

千名人はいふともおりつがむわがはたものものしる麻ごろも

千名人雖云織次我二十物白麻衣

初句を舊訓にチナニハモとよめるを古義に千を干の誤とし名は古寫本の傍書に各とかけるによりて干各に改めてカニカクニとよめり。案ずるに卷四七九〇頁にわが名はも千名の五百名にたちぬとも君が名たたばをしみこそなけ

といふ歌あり。もしそれと同例ならばワガ名ハモ千名ニタツトモなどあるべく千名ニハモ人ハイフトモとはいふべからず。さればしばらく古義の説に従ひてカニカクニとよむべし。干はカニの訓に(卷十二イザリスルアマノカヂノト湯鞍干)各はカクの訓に借れる例あり(卷十三各鑿社吾コヒワタリナメ)。又思ふに千名は左右の誤にあらざるか。さらば愈安んじてカニカクニとよむべし。○一首の意は人ハ色々ニイヒサワグトモ心ヲ變ゼズシテツギテ逢ハムといへるにて既に逢ひての後の歌なり。卷四七九三頁にも

かにかくに人はいふとも若狭ちののちせの山ののちもあはむ君とあり

寄玉

あぢむらの十依海に船うけてしら玉探人にしらゆな

安治村十依海船浮白玉探人所知勿

十依は舊訓にトヲヨルとよめり。トヲヨルは卷二三一〇頁にナヨ竹ノトヲヨル子ヲハ、卷三(五〇六頁)にナユ竹ノトヲヨル御子とありて靡き寄ることなり。雅澄はここには然いふべくもなしといひて十を群の字の誤寫としてムレヨルとよめり。されど海上に浮べるあぢの村島の浪風にすまはずして一方に靡き寄る事とすればトヲヨルにて通せざるにあらず。略解に「あぢむらの群飛ぶ列をかくいへり」といへるは従はれず。○第四句を舊訓にシラタマトラムとよめるを代匠記に「白玉トルトとも讀ぬべし」といひ古義に「シラタマトルトとよむべし」といへり。げにシラタマトラムならば結句は人ニ知ラエズとあらざるべからず。さればシラ玉トルトとよむべし。さて上四句はただ相逢フトといふことをたとへたるなり。略解に「さて上は序

のみと^レいへるは妄なり。白玉を採る形容なりとこそいふべけれ
をちこちの磯の中なる白玉を人にしらえず見むよしもがも
遠近磯中在白玉人不知見依鴨

集中にヲチコチといへるには遠及近即今の世にいふ所と遠或近との二種あり。こ
こは俗語にソコラといふ意にて遠近數處の謂にあらず。上(一二六三頁)にも舟ヨバ
フコエヲチコチキコユとあり。○イソは大石なり。古書に石と書いてイソとよませ
たり。ナカナルは其大石ノ間ナルとなり。卷(二三一四頁)に石中死人とある石中もこ
このイソノナカと同義なるべし。○此歌のシラタマは美しき小石なり。鮫珠にあ
らず。○一首の意は窃に女に逢はむといへるなり

わたつみの手にまきもたる玉ゆゑにいその浦廻にかづきするかも
海神手纏持在玉故石浦廻潜爲鴨

ワタツミは海神なり。マキモタルは玉に紐をとほして手にまきてもてるなり。ユエ
ニはナルニなり。卷(一三九頁)にも人ヅマユエニワレコヒメヤモとあり。三四の間に

ソヲ得ムトシテといふことを補ひて聞くべし。略解古義に夫ある女をこふるなり
と見たれど親の守れる女をこふる譬ならむ

わたつみのもたる白玉みまくほり千遍告かづきするあま
海神持在白玉見欲千遍告潜爲海子

第四句を契沖はチタビヅツゲシとよみ略解にはチタビヅノリシとよめり。契沖の
訓に従ふべし。さて四五はアマタビ海人即媒ニイヒキとなり。古義に「海人をたの
みて千返告しといふならむ」といへるは非なり。海人ヲタノミテといふことをアマ
とはいひ放つべからず

かづきするあまは雖告わたつみの心不得所見不云
潜爲海子雖告海神心不得所見不云

雖告はツグレドとよむべし(略解にはノレドモとよめり)○四五は略解にココロシ
エネバミユトイハナクニとよみ古義にココロシエネバミエムトモイハズとよめ
り。案ずるにココロシエネバミエムトイハナクとよむべし。○一首の意は

海人(媒)ハ白玉(女)ニ我見マクホリスル事ヲ告グレド海神(即親)ノ心ヲハカリカヌ
レバ我ニ見エムト玉ノ云ハヌコトヨ

といへるなり。以上二首一聯の歌なり。前々の歌は自かづきする趣にいへるなれば
此二首とは相與からず。又前の歌の告は作者が海子に告ぐるにて此歌の告は海子
が白玉に告ぐるなり。相混すべからず

寄木

あま雲のたなびく山のこもりたる吾忘木葉知_{ワガシタココロ}

天雲棚引山隠在吾忘木葉知

宣長の説に

忘は下心二字の誤て一字と成たる也。上二句はコモリの序也

といへり。○知は舊訓の如くシルラムとよむべし。略解には「知の下一本良武の二字
有」といへり。木葉は女をたとへたるなり。古義には知をシリケムとよめり。こは卷三
(三九五頁)にマキノ葉ノシナフセノ山シヌバズテワガコエケバ木葉知家武とあ
るによれるなれど此歌と今の歌と相通へる所なし。今は序に山をいへる縁にて女

を木葉にたとへたるのみ

みれどあかぬ人國山の木葉己心なつかしみもふ_{コノハタシタココロニ}

雖見不飽人國山木葉己心名著念

契沖いへらく

人國山は大和なり。下の歌に秋津野とつづけて云へるにて芳野に有なるべし

といへり。○第三句はコノハラバとよむべし。略解古義にはコノハラシとよめり。○

第四句は舊訓にオノガココロニとよめるを宣長は

是も己は下の誤にてシタノココロニと訓べし

といへり。之に従ふべし。シタノココロは心ノウチなり。○契沖いはく「ミレドアカヌ
木葉とはもみちを云なるべし」と。黄葉ならばただにモミヂといふべし。コノハとい
へるを見ればなほ緑葉なり。○ナツカシミモフはナツカシガリ思フとなり。この木
葉も女をたとへたること勿論なり。略解に「他妻をこふるにたとふ」といへり

寄花

この山の黄葉下花矣我小端見反戀

是山黄葉下花矣我小端見反戀

第二句以下を契沖は

もみぢのしたの、はなをわが、はつはつにみて、かへりてこひし

とよみ宣長は花矣を咲花の誤とし反を乍の誤として

もみぢのしたに、さくはなを、われはつはつに、みつつこひしも

とよみ雅澄は宣長の誤字説に従ひてただ結句をミツツコフルモとよみ改めたり。

案ずるにハツハツニはチトバカリといふことなれば(卷四四七頁)にもハツハツニ人

ヲアヒ見テ云々とあり(ミツツといはむと相かなはず。しばらく契沖の訓に従ふべ

し。さてモミヂノ下ノ花は契沖のいへる如くかへり花なり。さてこそハツハツニミ

テとはいへるなれ

寄川

この川ゆ船はゆくべくありといへどわたり瀬ごとにもる人有

從此川船可行雖在渡瀬別守人有

コノ川ユは此川ヲなり。ユクベクは渡リユクベクなり。上三句は妹の許して逢ふべ

くなれるをたとへ云へるなり○有を略解古義にアルヲとよめり。アリテとよみて

モル人アリテ渡リ行カレズといふべきを略したりとすべし。卷十一に

玉緒のあひだもおかずみまくほりわがもふ妹は家遠在而

とあり。是例とすべし

寄海

大海候水門ことしあらば從何方君吾率陵

大海候水門事有從何方君吾率陵

初二を略解にオホウミヲマモルミナトニとよみ宣長はオホウミハマミナトヲマモ

ルとよめり。さて略解には

太宰の津は西蕃を候るなればかくいへるならん

といひ古義は宣長の訓に従ひて

大海は大海神をいふべし。即大綿津見神なり

といへり。なほ下に云ふべし。○第四句は略解にイヅクユ君ガとよめるを古義にイヅへヨ君ガに改めてイヅクヘゾと譯せり。○結句の陵は略解に「恐らくは隱の誤なるべし。しからばキカクサンと訓べし」といひ古義に隱字の誤といふ説に従ひてキカクレムとよめり。○案ずるに集中にマモリとあるに目守の意なると間守の意なるとあり。こゝは前者の方なるべし。さて初二は略解の如くオホウミヲマモルとよむべし。但其意は舟に乗りて港にありて大海の様子を目守りをする事とすべし。○第四句はイヅクユキミヲとよむべし。このユは上_一三_〇八頁なるワガ舟ハ沖ユナサカリのユとひとしくニにかよふユなり。○結句はワガ_△キカクレムとよむべし。君ヲ率テワガ隱レムといへるなり。○譬喩は初二のみにて逢フベキ時ヲ待ツ程ニといふことなるべし。

風ふきて海はあるともあすといはば久しかるべし君がまにまに

風吹海荒明日言應久君隨

初二はサハリアリトモといふことをたとへたるなり。此一列の譬喩歌の中に一首

すべての譬喩なると數句のみの譬喩なるとあり。心得おかざるべからず。○ヒサシカルベシは待遠ナラムとなり。君ガマニマニは強ヒテ逢ハムトナラバ逢ハムとなり。○こは前の歌の答なり。

雲がくる小島の神のかしこけば目^メ間^ヘ心^ト間^コ哉

雲隱小島神之恐者目間心間哉

右十五首柿本朝臣人麿之歌集出

クモガクルのカクルは四段活につかひたるなり。小島はいづくのにもあるべし。初句は准枕辭にて第二句は女の親などをたとへたるなり。○四五は契沖はやくメハヘダツレドココロヘダツヤとよみ略解古義共に之に従へり。案ずるにメは上にもいひし如くミエの約なればメハヘダタルとはいふべくメヲバヘダツルとはいふべからず。而してヘダタルは古語にヘナルといへばたとへば卷四六八頁にヒトヘ山^{ヘナレ}重^レ成^ルモノヲとあり。こゝはメハヘナルトモとよむべし。○結句を前にいひたる如くココロヘダツヤとよみて略解には心ハ隔テムヤと譯し古義には心マデ隔ツラムヤハと譯せり。いづれにしてもさる意をココロヘダツヤとはいふべからざる上

にこゝは心ヲ隔テムヤといふべき處にあらで心ハ遠ザカラムヤといふべき處なればココロヘナラメヤとよむべし。否さては言餘りて調よからねばココロヘナレヤとよむべし(ラメヤをレヤといへるは集中に例多し)○古義に初二を雲隱光鳴神之の誤ならむといへるは従はれず

寄衣

つるばみの衣△人者事なしといひし時よりきほしくおもほゆ

橡衣人者事無跡曰師時從欲服所念

第二句は舊訓にキヌキル人ハとよめり。宣長は衣者人の誤としてコロモハヒトノとよめり。舊訓に従ふべし。衣の下に一字をおとせるなり○イヒシはキキシにおなじ。下なる

葦の根のねもころもひてむすびてし玉の緒といはば人とかめやも

つき草にころも色どりすらめどもうつろふ色といふがくるしさ

といふ歌のイハバ、イフガも人ノ云ハバ、人ノ云フガにてやがてキカバ、キクガなり

○ツルバミノコロモはツルバミ即ドンダリのかさにて染めたる黒衣なり。略解に

ツルバミはいにしへ賤者の服也、貴人は所せき身にていさゝかの事も言しげくいひなされなどすれば賤者の中中に事なきを羨てさて賤女を戀る事有てよめるなるべし

といへり。『さて賤女を』以下は従はれず。我モ賤者ニナリタシト思フといへるなり○キホシはキマホシなり。上(一三四八頁)にも見えたり。ミマホシを見ガホシと云へると類例なり

凡爾吾しおもはばしたにきてなれにし衣をとりてきめやも

凡爾吾之念者下服而穢爾師衣取而將著八方

卷十二にも

凡爾われし念はば人妻にありといふ妹にこひつつあらめや

とあり。凡爾は舊訓略解古義にオホヨソニとよめれどオホロカニとよむべし。卷六(二〇八六頁)に凡可爾オモヒテユクナマストラヲトモとあり又卷十九慕振勇士之名歌に於保呂可爾、ココロツクシテ念フラム、ソノ子ナレヤモ又卷二十喻族歌に於煩呂加爾、ココロオモヒテとあればなり。意はオホヨソニ、ナホザリニといふに同じ